日本地理正宗

佐久間舜一郎 著

前編上巻

佐久間舜一郎著

日本地理正宗

前編　全二冊

東京　普及舍
教育書專賣所

日本地理正宗

緒言

一本邦地誌ノ類古來其數充棟啻ナラズト雖其書概ネ一片ノ名物誌ニ過ギズ、或ハ徒ニ名所古蹟ト稱スルノ類ヲ臚列シテ、古人ノ歌謡、及好事者流ノ詩文ヲ集輯シ、荒誕鹵莽採ルニ足ラザルノ事柄ヲ記録シ、或ハ專ラ神社佛閣ノ縁起由緒ヲ説キ連ネテ、種々妄誕無稽ノ事ヲ掲載シ、或ハ主トシテ山原河海ノ名稱ヲ排列シテ、其位置所在ヲ知ラシムルニ止リ、或ハ陸産ニ水産ニ皆其名稱出所ヲ擧グルヲ主トシテ、未曾テ其消長需用ノ如何ヲ説カズ、是等ノ種類皆悉ク眞正ノ地誌ヲ以テ名稱スベカラズ、特ニ近來ノ地理書ト稱スルモノ、概ネ先輩ノ舊

誌ヲ抜萃改竄スルニ止リテ、一モ其著者ノ意見ニ成リタルモノヲ見ズ、故ニ其實ハ題ヲ改メ名ヲ變ヘテ舊誌ヲ編叙スルニ過ギズ、斯ノ如キハ獨リ罪ヲ先輩ニ得ルノミナラズ、又實ニ學問社會ノ罪人ト云フベシ、

一本書ノ編輯ハ專ラ本邦一般ノ地勢、山原河海ノ狀況及、都鄙風俗ノ概ヨリ、農商殖産ノ一斑、竝ニ海陸交通ノ實況、水陸ノ諸産物ニ至ルマデ、本邦人ノ晨夕必ズ其記憶ニ附スベキ、地理上ノ要項ヲ載録シタルモノニシテ、名ヅケテ之ヲ日本地理正宗ト云フ、以テ在來ノ地理書ト其編述法ヲ甄別センガ為メナリ、

一地理ヲ叙述スルニ自ラ順序アリ、總論ヲ以テ全國一般ノ事實ヲ概括シ、記事ヲ以テ諸道各國ノ狀況ヲ詳ニス、

是レ本編編次ノ體裁ニテ、之ヲ分テ前編後編ノ二部トシ、各其目次ヲ分テ更ニ之ヲ相聯接ス、

一編次ノ體裁或ハ簡單ナル論斷ニ起リテ、其事實ニ及ビ、或ハ事實ヲ前ニシテ、其論斷ヲ後ニスルアリ、或ハ記事中ニ表記ヲ挿ミ、或ハ叙事ヲ省略シテ其説明ヲ圖畫ニ讓ルアリ、毎章其體裁ノ一ナラザルハ唯其事態ノ本旨ヲ明ニスルヲ主トシテ、文章字句ノ如何ニ拘ラザルニ由ルノミ、

一本編ノ事實ハ諸官省及各府縣官衙ノ統計書、或ハ各府縣ニ向テ新ニ請求シタル調書、竝ニ各地知友ノ報道書類等ニ據リ、傍ラ自ラ實践探究ノ事實等、彼是相參酌蒐集シ、務メテ確實正當ノ事項ヲ採リ、專ラ明治十九年中

ノ調書ヲ基礎トシ、或ハ往々廿年廿一年ノ事實ニ渉リタルモアリ、其事ニ依リテ其年次ヲ標彰スルハ皆以テ事實ノ講究ニ便スルナリ、

一本邦統計書ノ編次各官衙相通シテ皆未詳悉正確ニシテ寸毫ノ誤謬ナシト云フ可カラズ、甲ニ密ニシテ乙ニ粗ナルアリ、丙ニ信ズベクシテ丁ニ疑フベキアリ、彼是撞着矛盾粗密乖離ノ條項少ナカラズ、是レ當時官衙ノ調査、其宜キヲ得ザルニ由ルニ非ズ、必竟一般ノ人民中往々事物ノ統計ニ暗ク、事ヲ記スニ概ネ粗漏糊塗ナルニ因ルヤ明ナリ、殊ニ沖繩縣下ノ如キハ、人口ノ調査スラ尚且官衙ニ公言セザルノ弊アリト云フ、況ヤ農工製産ノ數量斛斗ニ於テヲヤ、其真正確實ヲ得ルニ難キコ

トシルベシ、斯ノ如キ類ハ、蓋本州各府縣下ノ間ニ於ル
モ亦必ズ無キヲ保スベカラズ、唯其表面ノ事實ヲ標準
トシテ講究スルノ外ナキハ、今日ノ事態ニ於テ又必ズ
免ルベカラズ、此編茲ニ注意スルコト最鄭重ナリト雖、
又或ハ其一二ノ誤謬矛盾ナキコト能ハザルベシ、

一予無識短才一モ自ラ得ル所ナシト雖、資性文事ヲ嗜ミ、
教育ニ從事スルモノ茲ニ十數年、特ニ地誌歴史ヲ讀ム
ヲ好ミ、近時本邦ノ地誌ナキニ感スル所アリ、坐シテ空
然正誌ノ出ヅルヲ俟ツベカラズ、遂ニ自ラ全國ノ周遊
ヲ企圖シ、明治廿一年二月ヲ以テ其途ニ上レリ、時正ニ
備前岡山ニ家居シ、其縣校教授ノ末班ニ在ルヲ以テ、官
衙ノ保護、同僚知友ノ私ニ保護スル者少ナカラズ、因テ

筆硯ヲ携ヘ、一僕ヲシテ一輛ノ車ヲ挽カシメ、先ヅ畿内東海ノ二道ヲ巡リ、次デ山陰北陸ノ諸國ヲ經テ羽前羽後ノ山川ヲ跋渉シ、竟ニ北海ニ航シテ其西南部ヲ歴遊シ、再ビ本土ニ歸リ、東山道ヲ東北ヨリ西南ニ貫キ、漸次山陽ニ入リ、海陸ノ里程凡一千數百里（陸路凡千三百四十八里餘、海程凡六百三十八里餘）ニシテ挽車毀損シ、復用ニ堪ヘズ、是ニ於テ更ニ新製ノ車ニ乘リ換ヘ、備後路ヨリ廣島山口ノ二縣ヲ巡リ、尋テ西海ニ入リ、其東北部ヲ東南ニ進ミ、日隅ノ二國ヲ經テ鹿兒島ニ至リ、是ヨリ海ニ航シテ西南ノ諸島ヲ探リ、十二月中ヲ以テ沖縄本島ヲ巡遊シ、本年一月ノ初再ビ薩摩ニ歸航シ、此地ヨリ更ニ本道ノ西部ヲ一周シ、轉ジテ南海ニ航シ、其南北ノ諸縣及紀州和歌山ノ地

方ニ至ルマデ、本邦府縣ノ在ル所至ラザルノ地ナク、二月下旬全ク全國一周ノ業ヲ完結シテ家ニ歸ルヲ得タリ、此間經ル所府縣官衙ノ保護周旋極テ厚ク、其調査ノ條項皆十分ノ目的ヲ達スルヲ得タルハ、獨リ予ガ此行ノ幸榮ノミナラズ、我地學上ニ於テ亦幾計カノ進歩ヲ賛ケタルニ非ザルハナシ、

明治二十二年七月　編者識

日本地理正宗前編上巻

目次

土地　農業

日本地理正宗前編上巻

佐久間舜一郎　著

總論

第一章

名稱

日本國ハ東半球ニ在リテ、亞細亞東部ノ海中ニ布置スル許多ノ群島ヲ總稱シタルモノニテ、其名稱何ノ時代ニ起リシヤヲ詳ニセズ

境域

境域ハ、北太平洋中阿西亞尼亞洲ノ北方、沖繩群島波照間島ノ南端、北緯二十四度六分ニ起リ、露領加察嘉海峡ニ接スル、千島國占守郡「アライト」

島ノ北端、五十度十六分ニ盡キ、經度ハ占守郡占守島ノ東端、百五十六度三十二分ニ起リテ沖縄群島與那國島ノ西端、百二十二度四十分ニ盡ク

地形及面積

地形ハ、東北ヨリ斜ニ西南ニ彎曲シ、綿亘凡六百餘里、廣袤三十里、若クハ六十里ニ出入シ、面積ハ、大約二萬四千七百九十四方里（十四万二千〇五十七方英里餘）アリ之ヲ外國ノ土壤ニ比スルニ、西隣支那ノ本土ハ、凡我九倍即二十一萬七千八百九十八方里ニシテ、東隣北米合衆國ハ、凡我十四倍即三十四萬二千五百九十方里アリ、北隣ナル露國ノ本土ハ、又是ヨリ稍大ニシテ、凡三十五萬千七百七十

外國比較

一畿八道

七方里アリ、之ヲ世界第一ノ廣大ナル邦土トス、歐洲ノ强國ナル英吉利國ノ本土ハ、却テ我ヨリモ稍小ニシテ、凡二萬〇二百八十四方里ナリト云フ（以上千八百八十七年刊行スコットケルチー氏ノ万國年鑑ニ拠ル）

邦制區畫

地形ハ、四大島ト許多ノ群島ヨリ成ルト雖、邦制上之ヲ畿道國郡ニ分チ、其中央ノ本土ヲ一畿五道ニ畫シ、畿内、東海、東山、北陸、山陰、山陽ト稱ス、其西南ニ在ル九州島ト壹岐對馬琉球ヲ西海道トシ、南ニ横ハル四國島淡路島ニ本土ノ南端一部ヲ合セテ南海道トシ、東北ニ離レタル一大島ト千島群島トヲ北海道ト云フ、以上ヲ總ベテ一畿

一廳三府四十三縣

八道トナス

此諸道ハ、大小各一ナラズ、大ナルハ十餘國ニ亘リ、小ナルハ數國ニ過キズ、而シテ其國土ヲ分テ又郡區市町村ヲ置キテ、布政ノ便ヲ圖リ、更ニ之ヲ廳府縣ニ分轄シ、全國ヲ一廳三府四十三縣トス、然レドモ此郡、區、市、町村、及廳、府、縣ハ時ニ分合廢置ノ變更アルガ為ニ皆是一定不動ノ名稱ニハ非ザルナリ

道名	國名	郡	市	國名	郡	市	國名	郡	市	國名	郡	市
畿	山城	八	一	大和	十五		河内	十六		和泉	四	一
内	攝津	十二	二									
東	伊賀	四		伊勢	十三	一	志摩	二		尾張	九	一

海道	三河	十	
	遠江	十三	
	駿河	七	一
	甲斐	九	一
	伊豆	四	
	相模	九	
	武藏	廿一	二
	安房	四	
	上總	九	
	下總	十五	
	常陸	十二	一
	小笠原嶋		
東山道	近江	十三	
	美濃	廿一	一
	飛驒	三	
	信濃	十六	
	上野	十七	
	下野	九	
	磐城	十四	
	岩代	十	
	陸前	十四	一
	陸中	十六	一
	陸奥	九	一
	羽前	十	二
	羽後	九	一
北陸道	若狹	三	
	越前	八	一
	加賀	四	一
	能登	四	
	越中	五	二
	越後	十五	一
	佐渡	三	
山陰道	丹波	七	
	丹後	五	
	但馬	八	
	因幡	八	一
	伯耆	六	
	出雲	十	一
	石見	六	
	隱岐	四	
山陽	播磨	十六	一
	美作	十二	
	備前	八	一
	備中	十一	

道	備後	十四	
	安藝	八	一
	周防	六	
	長門	六	一
南海道	紀伊	十一	一
	伊豫	十六	一
	淡路	二	
	土佐	七	一
	阿波	十	一
	讃岐	十二	一
西海道	筑前	十五	一
	肥前	十六	二
	薩摩	十三	一
	筑後	十	一
	肥後	十五	一
	壹岐	二	
	豊前	八	
	日向	十	
	對馬	二	
	豊後	十	
	大隅	九	
	琉球	間切	四十三
北海道	渡島	六	
	北見	八	
	釧路	六	
	後志	十七	
	膽振	八	
	根室	五	
	石狩	九	
	日高	七	
	千島	九	
	天鹽	六	
	十勝	七	

道廳府縣	管轄國名
北海道廳	北海道一圓
東京府	武藏内一市六郡
	伊豆内島七
	小笠原島

一　　廳

京都府	山城一圓	丹後一圓	丹波内五郡		
大坂府	河内一圓	和泉一圓	攝津内一市七郡		
神奈川縣	相模一圓	武藏内一市六郡			
兵庫縣	播磨一圓	但馬一圓	淡路一圓	攝津内一市四郡	丹波内二郡
長崎縣	壹岐一圓	對馬一圓	肥前内一市六郡		
新潟縣	越後一圓	佐渡一圓			
埼玉縣	武藏内十七郡	下總内一郡			
千葉縣	安房一圓	上總一圓	下總内八郡		
茨城縣	常陸一圓	下總内六郡			
群馬縣	上野一圓				
栃木縣	下野一圓				

三府

三重縣	伊賀 圓一	伊勢 圓一	志摩 圓一	紀伊内 郡二
愛知縣	尾張 圓一	三河 圓一		
静岡縣	遠江 圓一	駿河 圓一	伊豆 七島ヲ除ク	
山梨縣	甲斐 圓一			
滋賀縣	近江 圓一			
岐阜縣	美濃 圓一	飛驒 圓一		
長野縣	信濃 圓一			
宮城縣	陸前内 一市十三郡	磐城内 郡三		
福島縣	岩代 圓一	磐城内 郡十一		
岩手縣	陸前内 郡一	陸中内 一市十七郡	陸奥内 郡一	
青森縣	陸奥内 一市八郡			
山形縣	羽前 圓一	羽後内 郡一		

四　十

秋田縣	羽後 一市内郡	陸中 一内郡	
福井縣	若狹 一圓	越前 一圓	
石川縣	加賀 一圓	能登 一圓	
富山縣	越中 一圓		
鳥取縣	因幡 一圓	伯耆 一圓	
島根縣	出雲 一圓	石見 一圓	隱岐 一圓
岡山縣	美作 一圓	備前 一圓	備中 一圓
廣島縣	備後 一圓	安藝 一圓	
山口縣	周防 一圓	長門 一圓	
和歌山縣	紀伊 一市内八郡		
德島縣	阿波 一圓		
愛媛縣	伊豫 一圓		

三　縣				
高知縣	土佐 一圓			
福岡縣	筑前 一圓	筑後 一圓	豐前 内六郡	
大分縣	豐後 一圓	豐前 内二郡		
佐賀縣	肥前 内十郡一市			
熊本縣	肥後 一圓			
宮崎縣	日向 内九郡			
鹿兒島縣	大隅 一圓	薩摩 一圓	日向 内一郡	
奈良縣	大和 一圓			
香川縣	讃岐 一圓			
沖繩縣	沖繩諸島 一圓			

第二章

地勢及山岳

樺太山系
支那山系

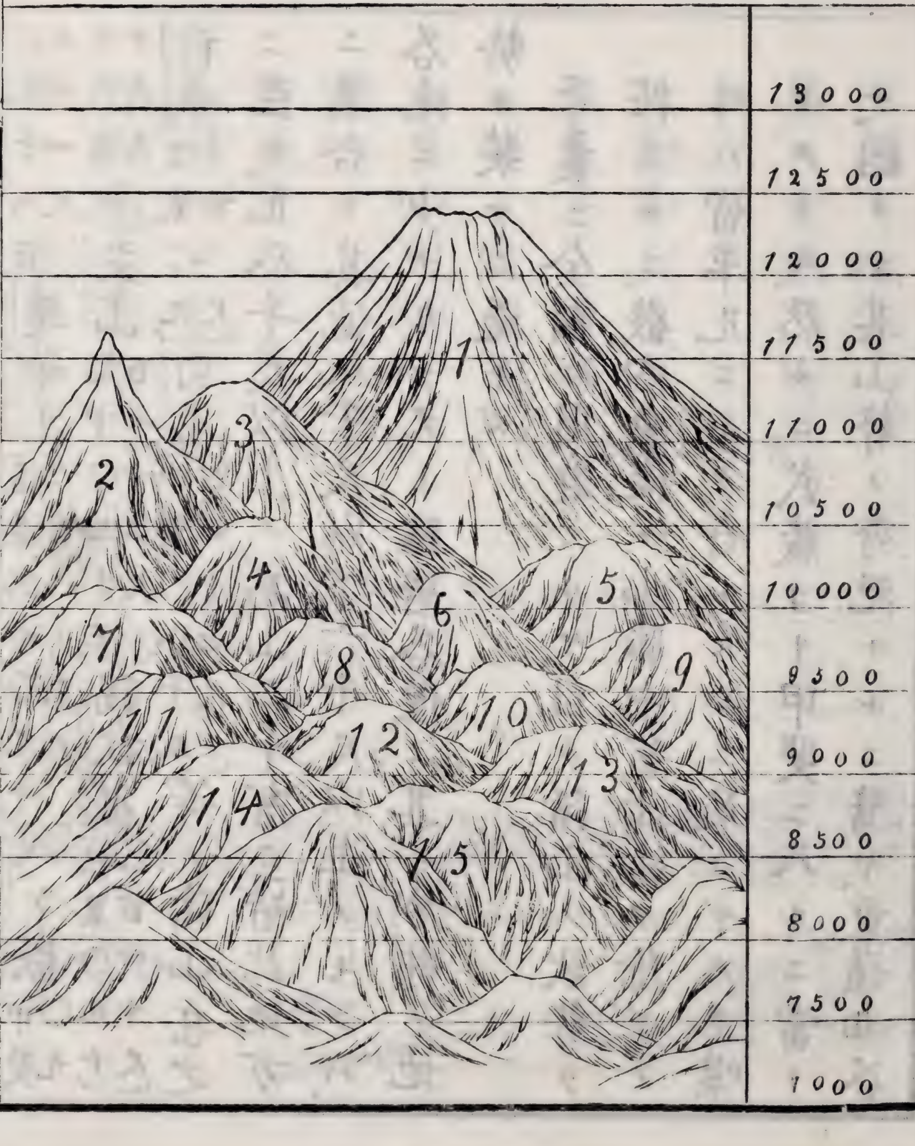
本邦ノ地勢ハ、從來ノ說ニ據レバ、山脈東北ニ起リ、蜿蜒西南ニ至リテ盡クト、此單一ナル地勢說稍一定シタルガ如キ傾キアリシモ、近時斯學ノ研究漸ク緻密トナルニ隨ヒ、眞理ヲ探討スル者、日ヲ逐テ輩出シ、現今稍確實ニシテ信據スベキ學說ニ云フ、日本群島（千島沖繩諸島ヲ除ク）ハ、其地脈ノ起ル所亞細亞大陸ノ東南山系相連續シテ畫ク所ノ一大半圓形ノ範圍中ニアル二種ノ彎曲セル山脈ノ集合ヨリ成立チシモノニシテ、一ヲ日本北彎或ハ樺太山系（南北ニ連リテ北翼ニ顯ルヽモノ）ト云ヒ、一ヲ日本南彎或ハ支那山系（西南西ヨリ東北東ニ連リテ南翼ニ見ハルヽモノ）ト云フ、其樺太山系ハ北ヨリ來リ、支那山系ハ、

山岳

西南ヨリ入リ、共ニ本州ノ中央部ナル、甲斐、信濃、飛驒、越中ノ地方ニ至リテ両山系始メテ相縫合シ、此地體ノ最モ廣キ所ニ於テ、隆起蟠結シタルモノナリ、而シテ千島沖縄ノ諸島ハ各一個簡單ナル彎曲形ノ隆起帯ヨリ成立チシモノニテ、日本群島地帯ノ組織トハ全ク其形状ヲ異ニスルガ如シト

茲ニ全國山脈中ノ高嶺ヲ按スルニ、冨士山（駿河甲斐〇一万二千四百六十七尺）ヲ以テ其第一峰トナシ、鎗岳（飛驒信濃〇一万一千六百五十二尺）穂高山（同上〇一万一千五百四十三尺）御岳（同上〇一万五百十一尺）乗鞍岳（同上〇一万四百五十一尺）白峰（甲斐〇一万三百十二尺）赤石山（信濃〇一万百三十五尺）駒ケ岳（甲斐〇九千九百三十四尺）大蓮華山（越中

日本最高山比較表


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
13000
12500
12000
11500
11000
10500
10000
9500
9000
8500
8000
7500
7000

○九千八百七十一尺〕蓮華山〔信濃越中○九千六百八十三尺〕八ケ嶽〔甲斐○九千六百七十六尺〕立山〔越中○九千三百七十二尺〕錫杖カ嶽〔信濃○九千二百四十尺〕前嶽〔信濃○九千百八尺〕白山〔加賀○八千九百四十七尺〕等ノ諸山岳之ニ亞ギ、凡八千尺以上ノ高山二十有三、皆此地方ニ集合シ、其他八千尺以下六千尺以上ノモノハ、各地ニ少ナカラズト雖、皆各僅ニ其一方部ノ地勢ヲ装フニ過ギズ

予曩ニ全國ヲ周遊スルヤ、自ラ諸山ノ狀勢ヲ按スルニ、畿内東海ノ山脈中、冨士山ヲ除クノ外ハ皆平凡ニシテ奇トスルニ足ラザルヲ嘆ジタリキ、然ルニ武藏ヨリ甲斐ニ入ルニ當リテ、始メテ其山勢ノ秀絶ナルニ驚キ、重嶺幽谷

ノ間ヲ跋渉シ、西ニ白根山、駒ケ岳ヲ望ミ、北ニ金峯山、八ツケ嶽ノ高峯ヲ眺ムルニ時正ニ五月下旬（廿一年五月廿四日）ナレドモ諸嶺皆雪ヲ戴キ、皎々トシテ恰モ南邦嚴冬中ノ一壯觀ヲ

冨山ノ神通橋上ヨリ劍岳諸山ヲ望ム



呈セリ、尋テ山陰ヲ經テ北陸ニ入リ、加賀、能登、越中ノ諸國ヲ巡ル頃ハ、七月初旬ヨリ中旬ニ渉リシニ、其南方飛驒信濃國境ノ高山ハ曩ニ甲州諸山ヲ觀望シタルノ趣ニ異ナラズ、特ニ越中ノ劔岳、大蓮華山等ノ諸嶺ハ、皆險峻巍峩トシテ、益其凡容ニアラザルヲ知リ、漸ク東北ニ進ミテ北海道ニ入ルヤ、全道ノ山容概ネ平凡ナリ、唯西南ニ駒ケ岳、しりうち岳、中央部ニ石狩、とかちノ諸山巍然トシテ通常山脈ノ間ニ屹立スルヲ見ルノミ、其他高原丘阜、或ハ曠漠タル一面ノ草野ヲ望ミテ、再ビ本土ニ歸リ、東山道ヲ東北ヨリ西南行シテ、陸中以南ノ小

淺間山ノ實景



山脈ニ接スルモ亦驚嘆スベキノ奇觀ヲ見ズ、漸次中央部ニ至ルニ隨ヒ、土地山脈共ニ漸々昂ヲ覺エ、那須岳（六千三百十尺）男體山（八千二百二十尺）等ノ高峯ヲ仰視シ、遂ニ上野下野ノ間ヲ經テ碓氷峠ヲ踰ルヤ、突兀トシテ更ニ高峻ナルヲ覺エ、淺間

火山

山ノ麓ヲ遠リテ、所謂ル佐久平ノ高原ヨリ遠ク西北ノ一帯ヲ望メバ、飛驒越中國境ノ峻峯層嶺犬牙竝列シテ其頂上皆已ニ白雪ノ皚々タルヲ戴ケリ、（廿一年十月十三日）既ニシテ善光寺平ヨリ南方ニ入リ、猿ケ馬場刈谷澤等ノ峠ヲ踰エ、有名ナル木曾山道ヲ探リ、其幽邃ナルヲ見テ感嘆措クコト能ハザリキ、其後山陽西海ヲ一周シ、海ニ航シテ遂ニ沖縄諸島ヲ巡リ、愈其關西及南島山脈ノ低小ナルヲ知得セリ

火山

抑本邦ノ連山ハ、概ネ火山脈ノ蜿蜒交錯シタルモノニシテ、現時其噴烟シツヽアル著名ノ活火

舊火山

山ハ北海道ノ硫黄岳（釧路）雌阿寒岳（釧路）樽前岳（膽振）駒ケ岳（渡島）東山道ノ燒山恐山岩木山（皆陸奥）、磐梯山（岩代）那須岳（下野）淺間山（信濃）東海道ノ三原山（伊豆大島）甑峰（八丈島）、西海道ノ由布岳（豊後）阿蘇山（肥後）霧島山（日向）櫻島（薩摩）ノ諸山ナリ、其他舊時ノ火山ニシテ今尚其蹟ノ山容地形ニ顯然タルモノハ、駿河ノ富士、愛鷹、相模ノ函根、甲斐ノ八ケ岳、信濃ノ蓼科、越後ノ燒山、越中ノ立山、加賀ノ白山、大日岳、伯耆ノ大山、肥前ノ溫泉岳、薩摩ノ海門岳、渡島ノ惠山、膽振ノ臼岳、後志ノ後志岳等是ナリ

駿河、相模、伊豆諸州ノ山脈中ニハ所謂ル玢岩、及凝灰岩ヨリ成リタル噴火質ノ地頗ル多ク、

信濃、越中、越後、上野、下野ノ地ニ至リテモ亦然リ、獨リ畿内ヨリ山陽、山陰ノ西部諸國ニ稍少ナキヲ覺エ、西海道、及其海南ノ諸島ハ、又概ネ火脈ノ集合地タルヲ知レリ、現ニ大隅ノ口之(クチノ)永良部(エラブ)島、琉球ノ鳥島ノ如キハ、其島中今尚小部分ノ噴烟熄マズ、島民多ク硫黄ヲ採リテ生計ヲ營ムト云フ

原野

本邦ハ地域狹小ニシテ、人口大ニ繁殖スト雖、現時尚不耕ノ原野頗ル多キノ狀況アリ、石狩ノ平野、十勝、釧路ノ草野ノ如キハ、姑ク之ヲ擱キ、〔後編北海道ノ部ニ詳述ス〕下總ニ小金原(コガネガハラ)、習志野(ナラシノ)、常陸ニ女化原(オナバケガハラ)、鹿

原野

田原、東原、駿河ニ冨士裾野、大野原伊豆ニ長者原、遠笠野、遠江ニ牧野原、磐田原、三方原アリ、上野ニ中野原、桃井原、下野ニ那須原岩代ニ對面原、磐城ニ守山原、陸中ニ一本木原、陸奥ニ仙ノ澤原、雲雀原、カス山原、二又平、羽後ニ大野臺、若林野、北野、羽前ニ鹽原、ミタケ野アリ、豊後ニ鶴見野北方原野、日向ニ唐瀬原、西原、山ノ神原、本地原、西嶽ノ高原、大隅ニ笠野原、肥後ニ波野原、大矢原等アリ、皆有名ナル高原或ハ平野ニシテ、概ネ水利ニ不便ノ土地ナルモ、此數多ノ曠原中ニハ或ハ其一部分ヲ開墾シタルモノアリ、或ハ一時開拓シテ再ビ荒蕪ニ歸シタルモノアリ、特ニ小金原、那須原、對

面原等ノ諸原野ハ、當時專ラ開墾ノ地トナリ、漸次ニ移住村落ヲユスノ狀勢アリ

予曩ニ常陸ニ入ルヤ水戸街道ヲ北行シ牛久驛ヨリ以北、田宮、猪子等ノ諸村落ヲ經タルニ、此地ハ總テ高原岡阜ニ道路ヲ通シ、其左右ハ概ネ曠漠タル原野ニシテ路傍ノ竝木ヲ除キ、唯一面ニ枯草灌木錯生シ、或ハ稚松其間ニ叢生シテ之ヲ點綴スルアルノミ、其地名ヲ問ヘバ、所謂ル女化原即是ナリ、尋テ東大和田村ヲ經ルニ、此路傍モ亦概ネ同前ノ曠原ヲ望ミ、是ヨリ土浦、石岡等ヲ經テ、水戸ニ至ル間大略曠漠ノ原野多ク、偶低地ニ下レバ或ハ浙々タル

常州女化原



水澤ト沮洳タル水田等ニシテ、地質ハ概ネ墳土壚埴相混シ、或ハ其表面全ク黒墳土ノ地アリ、或ハ赤墳ニ砂土ヲ雜エタルモアリ、而シテ砂礫磽确ノ地ハ甚稀ナルガ如シ、已ニシテ鹿島郡沿海ノ地ヲ巡

リシニ此地方ハ概ネ砂墳相雜リタル地ニシテ、一望際涯ナキ高原平野ノ間ニ人造ノ松林多ク、其他ハ概シテ荒蕪ノ草野ヲ見ルノミ、其後東山道ヲ探リ、陸奥國野邊地村ノ以南ヨリ連日南行シテ益不耕ノ廢地多キヲ慨歎シ、（将來實業ニ汲々タルノ人士輩出スルニ至ラバ、森岡以北青森ニ至ルノ迄、凡五十餘里間ノ曠地ハ忽チ變ジテ牧畜ノ要區トナリ、或ハ農耕ノ良土トナルヤ期シテ知ルベキナリ、明治盛世ノ今日我本土ノ内ニ此ノ如キ漠大ノ空地ヲ存スルハ、此漫遊中ニ予ガ脳裏ヲ刺衝スル最モ甚キヲ感セリ）尋テ對面原ノ漸次開拓ノ野トナルヲ喜ビ、遂ニ那須野ノ高原ニ上リテ、其地勢ヲ按スルニ、西北那須岳ノ麓ヨリ東ハ舊街道芦野、越堀ノ諸村ニ亘リ、南方ハ松尾川（那珂川ノ支流）ノ流

ヲ踰エ、石林、平澤等諸村落ノ際ニ至ル迄、一望數里ノ間、一ノ小阜一ノ岡陵ヲ見ズ、唯正南ノ雲際ニ常陸ノ筑波雙峰ヲ遥望スルノミ、此曠漠タル原野（那須東原西原ノ稱アリテ東原ハ、東那須野村ニ屬シ、東西二里十八町、南北一里十八町、面積凡四千八百十六町十歩アリテ、現ニ耕作地ト成リタルモノ、凡百三十二町一反餘、西原ハ、三島那須野ノ二村ニ屬シ、東西三里十五町、南北一里二十町、面積凡五千二百八十町歩アリ、已ニ耕作地トナリタルモノ、凡二百十町歩、其他夕狩原、糟塚原等ノ名稱アリテ、皆此地方一帯ノ曠野タリ）ノ間ニ、那珂川ノ流ヲ引キテ、數派ノ溝渠ヲ通ジ、以テ其開墾耕地ノ灌漑ヲ便ニス、地質ハ此一帯ノ曠野中各處素ヨリ同一ナラザレドモ、概ネ表面ハ壚土ニ凝灰岩質ノ燒土ヲ混シ、其二三尺乃至四五尺ノ下ハ、嵓

塊磽确ノ地多キヲ認メ、将來耕耘ノ利果シテ如何ナルベキカヲ苦慮スルニ至レリ

已ニシテ又西海ノ諸國ヲ周遊スルニ當リテ、日向大隅ノ地原野多クシテ、人口ニ乏シキヲ歎ジ、其氣候ヲ問ヘバ頗ル溫暖、其地質ヲ探レバ概ネ薄瘠ナレドモ（草木ノ腐敗シタルモノ年ヲ積ミテ漸ク墳土ト化シタルモノ）多キヲ見ル現ニ草木ノ茂生スルヲ見レバ、必ズ耕種ニ適セザルニ非ラズ、東方海岸ノ地ヲ除クノ外ハ、砂土少ナクシテ黑墳土多ク、桑園ニハ適セザルモ甘藷、甘蔗ニ宜ク、且ツ溪谷ノ地ニハ三椏、楮ノ類ヲ栽培スベク、最モ橙、橘、柑、柚ノ類ニ適スルヲ知レリ、其他ハ往々牧畜

ノ場ニ充ツベキノ地アリ、

河湖沼

本邦ハ土壤狹小ニシテ、山岳概ネ其中央ニ蟠結シタルガ故ニ、此山溪ニ發スル河流總テ大河ト稱スベキモノナク、其曾テ長流ノ名アルモノモ僅ニ百數十里ヲ出デズ、即北海道ノ石狩川ハ其流域百六十七里ニ渉ルヲ以テ、之ヲ全國第一ノ長流トス、之ニ亞グヲ北陸道ノ信濃川トシ、其延長凡百里餘、其他ハ北上〔七十九里〕阿武隈〔七十七里〕利根〔七十餘里〕天塩〔七十里〕木曾〔六十六里〕最上〔六十二里〕天龍〔六十里〕射水〔五十八里〕阿賀〔五十七里〕神通〔五十二里〕江〔五十里〕紀の〔四十七里〕川内〔四十六里〕大井〔四十六里〕那珂〔四十二里〕吉野〔四十一里〕等其長流皆凡四十

里以上乃至百數十里ニ達スルモノ大略二十餘流、其他長流四十里ニ至ラザルモ、其幅員ノ大ナルヲ以テ等シク大河ノ稱アルモノハ、筑後ノ筑後川〔三十五里〕駿河ノ冨士川〔三十六里〕肥後ノ玖摩川〔二十四里〕攝津ノ淀川〔十九里餘〕ノ如キ是ナリ、以上ノ諸大川ハ皆舟楫ノ利灌漑ノ便ヲ有シテ、各其地方ノ冨源ニ非ザルハナシ、今此諸流ノ中二三ノ概況ヲ載スベシ

石狩川ノ状況

石狩川ハ、其幅員甚大ナラズト雖、水源ノ遠キト數多ノ支流トヲ併スガ為ニ、常時水深クシテ急激ナラズ、河口ヨリ上流數十里ノ間、小滊舩ヲ通ズルヲ得ベシ、故ニ他日此沿岸左右ノ曠野變ジ

信濃川ノ狀況

テ耕種牧畜ノ良土トナルニ至ラバ其運漕ノ便灌漑ノ利亦必ズ少小ナラザルヲ知ルナリ

信濃川ハ、其上流岩石ノ間ヲ激流シテ舟楫ニ便ナラザルモ、越後國中魚沼郡ノ十日町以下ハ、漸次ニ緩流トナリ、長岡ヨリ新潟ニ至ル凡十七里餘ノ間、小瀛船ヲ通ジテ上下ノ運漕ヲ便ニス、予此下流ニ航シテ親ク水勢ノ緩急ト沿岸ノ狀況トヲ探リシニ、河底沿岸ノ地共ニ皆砂土ニシテ、岸低ク水淺ク、（時正ニ廿一年八月三日炎暑ノ候ナルヲ以テ水量特ニ少ナカリシ）濶キハ六町餘、狹キモ三四町許ニ見受ケラレ、其流甚緩ニシテ舟行モ亦極テ緩ナリ、三條ヨリ下流ノ沿岸ハ各所堤防及河身ノ工事中ナリ

キ、聞ク所ニ據レバ、此沿岸地方ハ毎ニ洪水ノ浸害ヲ受クルコト甚多キモ之ガ為ニ其田園ニ於泥ノ肥料ヲ遺輸スルコトモ、亦極テ少ナカラズト云フ

北上川
利根川

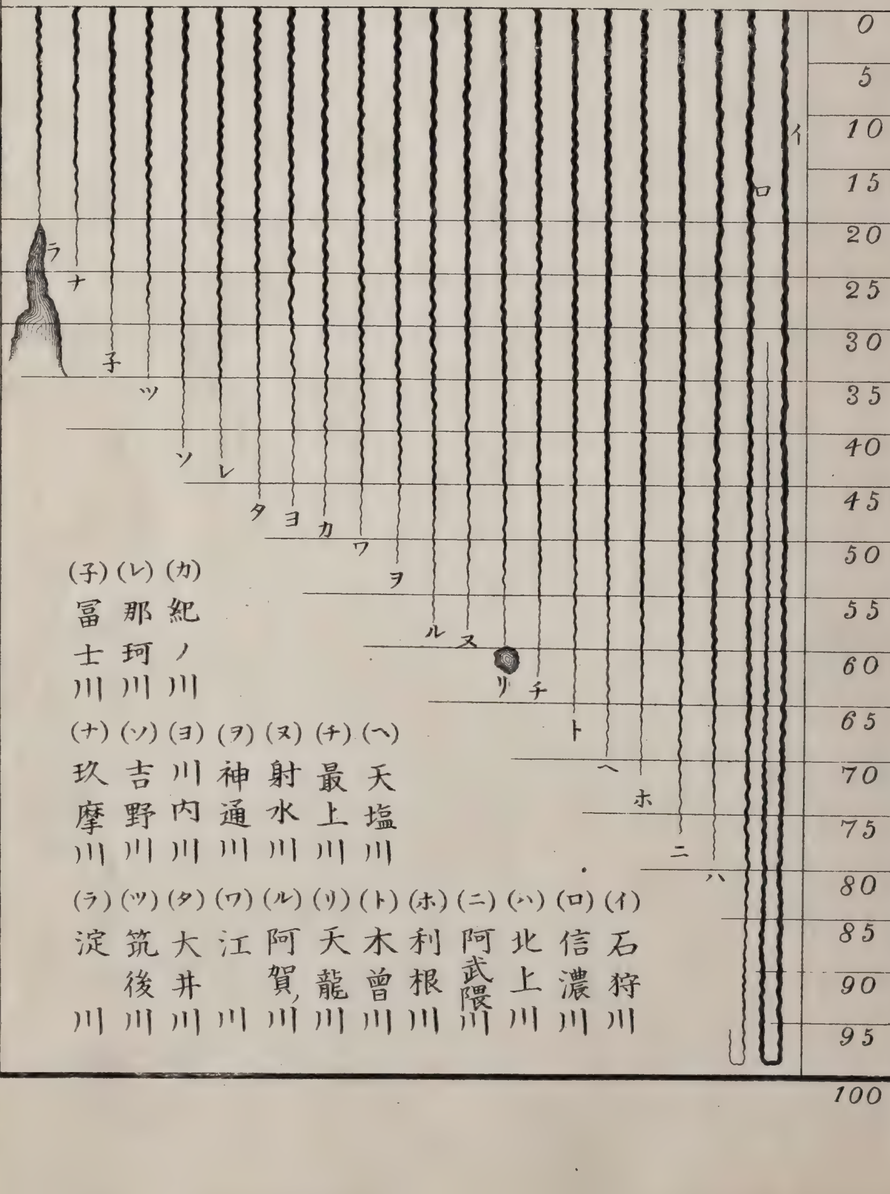
北上、利根ノ二流ハ、共ニ關東、東山道ノ便利ヲナシ、其下流十數里ノ間、各小瀛船ヲ上下シ、河口幅濶キヲ以テ、沿岸ノ地方甚キ浸害ヲ受ケズ、水産ノ利（鮭鯉鮒ノ類）亦極テ少小ナラザルナリ

以下ノ諸流ハ其地ニ據リ、其事ニ觸レテ、皆其得失便否ヲ交互ニ錯出スルヲ以テ、今殊更ニ茲ニ之ヲ辨ゼズ

湖沼

湖沼モ亦渺茫タル大湖巨沼ト稱スベキモノナ

日本長流之里程

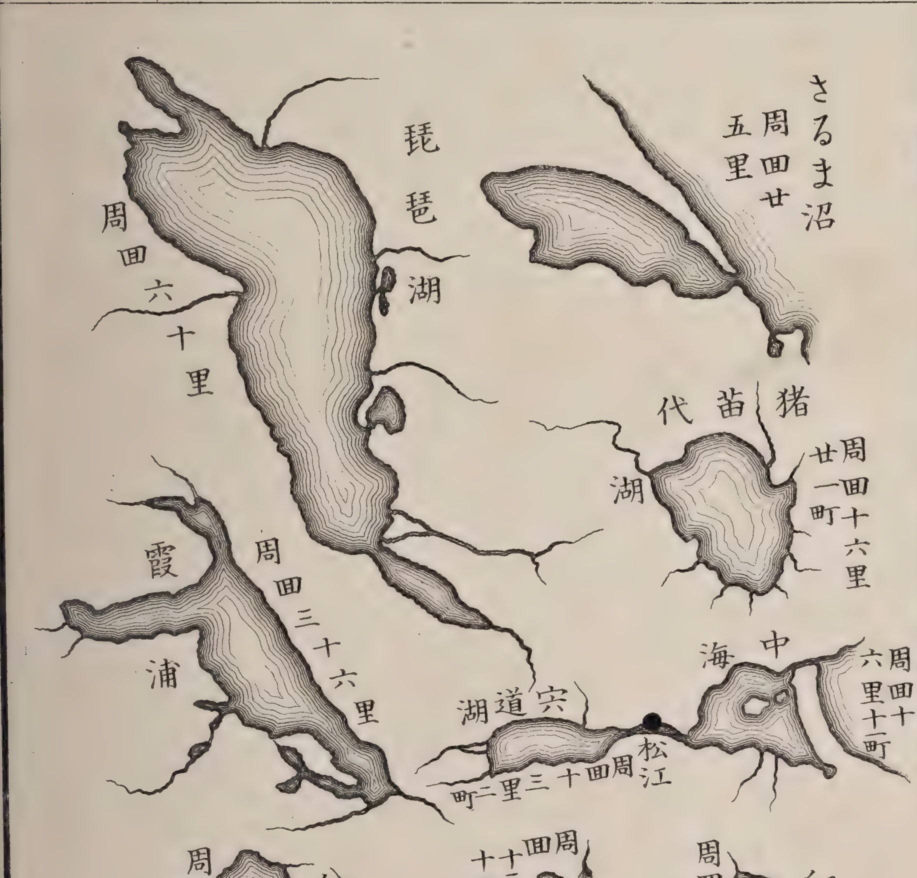


(イ)石狩川 (ロ)信濃川 (ハ)北上川 (ニ)阿武隈川 (ホ)利根川 (ト)木曽川 (リ)天龍川 (ル)阿賀川 (ワ)江川 (タ)大井川 (ツ)筑後川 (ラ)淀川

(ヘ)天塩川 (チ)最上川 (ヌ)射水川 (ヲ)神通川 (ヨ)川内川 (ソ)吉野川 (ナ)玖摩川

(カ)紀ノ川 (レ)那珂川 (子)冨士川

日本大湖沼ノ形状及其周囲里程



琵琶湖ノ狀況

ク、獨リ近江ノ琵琶湖ヲ以テ全國中ノ一大湖トス、其周圍凡六十里〔一ニ七十三里三十一町ト云フ、本書ハ滋賀縣廳明治十六年ノ調査ニ拠ル、實ニ五十九里三十二町〕南北ノ長十六里餘、東西ノ幅員濶キハ五里半強、狹キハ一里弱ニ出入シ、其面積凡八十方里餘、水深クシテ透明鏡ノ如ク、近江八景ノ稱アリテ風色絕佳、沿岸ノ田圃村落皆此水利ニ據ラザルハナシ、加フルニ水產ニ富ミ、魚貝ノ肉食フニ足リ、泥藻ノ肥料獲テ盡クス可カラズ、夙ニ小滊船數艘ヲ浮べテ、湖上ノ運漕旅客ノ往來ヲ便ニス、實ニ本邦第一ノ要區ニ在リテ、又第一ノ要湖ナリ

霞ケ浦

琵琶湖ニ亞グヲ常陸ノ霞ケ浦トス、周圍凡三十

四里餘、南北凡八里、東西ノ幅員濶キハ三里餘、狹キハ一里餘、乃至半里弱ノ間ニ出入シ、面積凡七方里餘、近時ハ湖中ニ小瀛船ヲ往來シテ沿岸各地ノ漕運ヲ便ニシ、其航路北浦湖口ヲ經テ利根川ニ通シ、下總ノ銚子港ニ相連絡ス、其他小舟ヲ通ズルノ區域甚廣ク、水產ノ鯉、鰻、鮒及雜魚ハ、以テ他郷ニ輸出スルニ足ルト云フ

此外ニモ北海道ノさるま沼、岩代ノ猪苗代、出雲ノ中海（ナカウミ）、羽後ノ八郎潟、陸奥ノ小河原（コガハラ）沼、出雲ノ宍（シン）道（ヂ）湖、下總ノ印旛沼等皆有名ナリ、各其地ニ就キテ其利便ヲ詳ニス

海洋港灣

陸地ノ形勢ヲ論ズレバモトシテ其四邊ヲ圍繞スル海洋港灣ノ深淺及地體ノ狀勢ヲ講究スベシトハ夙ニ地學上ニ稱通スル所ナルガ今ヤ本邦ノ位置ニ據リテ其近接ノ海洋ヲ説クニ當リ地學雜誌載スル所ノ日本地勢論〔理科大學教授原田豊吉氏ノ論説〕ヲ省略シテ左ニ其主要ヲ抄録シ併テ其圖面ヲ附記ス

地球上最モ深キ海床ハ太平洋ノ東北部ニ在テ即チ一大長盤ヲナシテ小笠原群島ノ東ヨリ來リ日本北灣及千島ノ東邊ニ沿ヒ阿琉山列島ノ南面ニ連ナルコレヲトスカロラ海床〔Tuscarora depth〕ト云フ其深サハ四千乃至五千

地球上ノ最深海

尋ナリ、全地球上實測シタル最深ノ點ハ、千島ノ東ニ於ケル海底ニシテ、四千六百五十五尋〔日本里程二里五町〕ニ達ス、〔中略〕

日本海ハ太平洋ニ比スレバ、其深サ極テ僅ニシテ、平均凡千二百尋ナラン、日本沿海ニ於テハ淺ク、西スルニ從ヒ漸ク深シ、其最深ハ中央ニアラズシテ、亞細亞大陸ノ方ニ偏スルナリ、支那東海及朝鮮海峽ハ頗ル淺海ニシテ、未曾テ百尋ニ達スル所ヲ發見セズ

瀨戸内ノ内海タルヤ、其深サ極テ淺ク、最深ノ處ト雖、三十尋ヲ超エザルナリ〔中略〕

日本北彎ノトスカロラ海床ニ接スルヲ撿ス


日本山脈竝ニ近海之深淺圖
1 百尋以内ノ淺海
2 自百尋至千尋
3 自千尋至二千尋
4 自二千尋至三千尋
5 自三千尋至四千尋
6 四千尋以上最深
オコック海
千島諸島
トスカロラ海床
日本海
朝鮮
東海
沖縄諸島
太平洋
小笠原諸島

レバ、最急斜ノアル處ハ、海岸ヲ隔ツルコト二十乃至六十海里ナリ、茲ニ於テ陸地ニ接スル百尋ノ淺海帶二三度ノ斜度ヲ以テ、吾遊星上最深ノ海床ニ入ル、故ニ日本地體及海床ノ境界ハ、海岸線ニアラズシテ、此急斜度ヲ以テ示サル、海岸ヲ二十乃至六十海里隔ツル所ノ一線タルヲ知ルナリ

日本群島ノ外形ヲ視察スルニ、其沿岸ノ日本海ニ面スルモノト、太平洋ニ面スルモノト、其間ニ大ナル差異アリ、前者ハ港灣ノ蜿曲ニ乏ク、殊ニ秋冬ノ候ニ至レバ、激浪怒濤常ニ其岸ヲ齕ム、之ニ反シ、後者ハ岬灣ノ出入ニ富ミ、其

沿海ヲ望メバ島嶼碁散頗ル航海ニ便アリ、今一例ヲ擧ゲ、本州ノ西北岸トノ差ヲ表スル其延長ノ里程ヲ以テスレバ左ノ如シ

陸奥津輕郡三厩ヨリ長門豐浦郡赤間關ニ至ル
- 日本海沿岸 六百五十一里
- 大平洋沿岸 千三百十一里

此ニ因テ之ヲ見レバ後者ノ屈曲ニ富ムコト、前者ニ二倍ス、今若シ此ノ如キ計算ヲ日本群島ノ全部ニ及ボサバ、其差三倍ニ達スルヲ見ルベシ

其レ此ノ如ク天然ノ地形ニヨリテ、北西ノ南東ニ比スレバ、海波ノ動靜ト港灣ノ多少ト直ニ本邦人ノ生計上ニ於テ著キ關係ヲナスコト、地學

オコック海

日本海

東海

ヲ講スルニ當リテハ、必ズ忽諸ニ附ス可カラズ、今此四邊ノ海洋ニハ、自ラ名稱ノ異ナルアリ、航海ノ難易モアリ、北海道ニ接スル最北ノ海ヲ、オコックト云ヒ、西北ヲ日本海ト云フ此海上ハ秋冬ノ際航海最モ危險ニシテ、特ニオコック海ノ北部、及浦鹽港ノ近海ニ至リテハ、嚴冬中堅氷大雪ニ其航路ヲ遮斷セラル、ノ憂アリ、且ツ春夏ノ候ト雖、千島群島ヨリ、北海道根室ノ沿海、及後志以北石狩天鹽等ノ海上ハ、毎ニ曚霧ノ為ニ海面ヲ蔽ハレテ、動モスレバ航海ノ滊舩進退維レ谷ルノ難ニ遭遇スルコトアリト云フ

又九州ノ西南ヲ東海ト云ヒ、支那台灣島ノ以西

支那海

ヲ支那海ト云フ、我長崎ヨリ支那諸港ニ至ル航路、常ニ此海上ニ據ル、四季ノ航海前者ニ比シテ稍平易ナリ

太平洋

本州ノ東南一帯ノ海ヲ太平洋ト稱ス、我國ヨリ北亞米利加及サンドウイチ諸島ニ往復スル航路ナリ、其他本州群島周圍ノ近海ニシテ、常陸ノ海

鹿島灘

ヲ鹿島灘ト云フ、此海上ハ風濤毎ニ荒クシテ航海ノ舩舶往々困難スルコトアリト云フ、是ヨリ

相模灘

南面ニ周リテ、相模ノ海ヲ相模灘ト云ヒ、伊豆ヨ

遠州灘

リ志摩ニ至ル一帯ノ海ヲ遠州灘ト云ヒ、紀伊ノ

紀州灘

海ヲ紀州灘、又ハ熊野浦ト云フ、此熊野浦及遠州灘ハ毎ニ狂風怒濤ノ起ル所ニテ、在昔元龜天正ノ

土佐沖、茅停ノ海、内海
播磨灘
水島灘
燧灘
硫黄灘

頃迄ハ、關東關西ノ船舶此海上ヲ航スルモノナク、豐臣氏ガ小田原ヲ征伐セシ時、大坂ヨリ糧食ヲ海運セントスルニ當リテモ、船主等皆此航路ノ難ヲ恐レテ、其初ハ容易ク命ニ隨ハザリシト云フ、現今ニ至リテモ滊船ニ非ザレバ定期安全ノ航海ヲナシ得ザル程ナリ

土佐ノ海ヲ土佐沖ト云ヒ、攝津ノ灣ヲ茅渟(チヌ)ノ海ト云ヒ、山陽南海ノ間ヲ總稱シテ内海ト云ヒ、又瀬戸内ト云ヒ、更ニ之ヲ小別シテ播磨ノ海ヲ播磨灘、備中備後ノ海ヲ水島灘、伊豫ノ海ヲ燧灘、其西ヲ硫黄灘ト呼ブ、此内海ハ航路頗ル平穩ナリ、周防ノ海上打開キテ遙ニ豐後豐前ニ相對シ、西

周防灘　響灘　玄界灘　天草灘　七島灘　日向灘　石見潟　能登海

ハ長門ニ接スルノ間ヲ周防灘ト云フ、内海ニ比スレバ稍風濤アルモ、瀛舩ノ航海ハ常ニ安全ナリ、長門ノ海ヲ響灘ト云ヒ、筑前ノ海ヲ玄界灘ト云フ、共ニ航海風濤ノ怖レアリ、肥前肥後ノ海ヲ天草灘ト云ヒ、薩摩ヨリ大島ニ至ル間ヲ七島灘ト云フ、此灘ハ沖繩ニ航スル第一危難ノ所ニテ毎ニ狂風潮ヲ巻キ、怒濤舩ヲ翻ヘスノ憂アリ、往時薩摩琉球往復ノ舩舶、往々覆没ノ難ニ罹リシト云フ、是ヨリ東北ニ亘リテ、日向ノ海ヲ日向灘ト云フ、前者ト相比シテ稍平穏ナリ、又日本海ニ接シテ、石見ノ海ヲ石見潟ト云ヒ、能登ノ海ヲ能登海ト云フ、共ニ秋冬中ノ航海ハ甚危險ナリ

黑潮

氣候

本邦ノ如キ狹長ナル陸地ハ、其海岸ヲ圍繞スル潮流ノ為ニ、各地顯然タル寒暖ノ差違ヲ生スルコト、地學上ニ於テ必ズ講究セザルヲ得ズ、因テ今地學雜誌ニ載スル所ノ日本海ノ潮流ト云フ一項ヲ左ニ摘録ス

我日本國ノ海岸ヲ圍繞セル潮流ノ最モ大ナルモノハ所謂ル黑潮ニシテ、北緯二十度台灣ノ近海ニ其源ヲ發シ、東北ノ方向ニ流レ來リテ、琉球近海ニ於テ二岐ニ分レ、一ハ本州ノ東南岸ヲ横ギル、是黑潮ノ本流ニシテ、一ハ北方ニ流レ、對馬ノ近傍ヲ經テ終ニ日本海ニ入ル、

リマン潮

之ヲ對馬潮流ト名ツケ、日本ノ西岸ヲシテ溫暖ナラシムルコト少ナカラズ、又日本海ニハ北方オコツク海ヨリ源ヲ發スル寒冷ナル潮流アリテ、之ヲリマン潮流ト云ヒ、滿州ノ東岸ニ接シテ西南ニ向ヒ、其末流ハ朝鮮ノ東岸ニ達スル者ナリトハ、一般ニ人ノ想像シタル所ナリシガ、明治十九年佛國ノ軍艦チユレンヌ號ガ日本海ヲ航行シタル時、海水ノ溫度ヲ撿シタリシニ、此想像ノ正シカラザルヲ發見シタリト、同號ガ八月ニ佐渡島ト浦鹽斯德ノ間、及北海道トオルガ灣ノ間トヲ航海セシ時ニハ、日本海岸ニ接スル對馬潮流ハ、攝氏二十六度、

リマン潮流ハ十九度程ノ溫度ヲ有シタリ、尚此リマン潮ヲ追テ朝鮮ノ東北海岸ニ至リタレドモ未其跡ヲ絶タザリシガ、此所ヨリ更ニ南ニ至リテ、朝鮮ノ東岸ニ近寄リタルニ、計ラズモ海水溫度ヲ增加シテ、其對岸ヲ流ルル對馬潮ニ等キ溫度ヲ得タリ、依テ此對馬潮ナルモノハ、日本海ニ入リテ、單ニ東北ニ流ル、者ニ非ズシテ、朝鮮對馬間ニ於テ兩岐トナリ、一ハ日本海岸ヲ傳ヒ、一ハ北方ニ流レ、朝鮮東岸ヲ經テ滿州ニ堺スルポスエット灣ノ近傍ニ於テ東ニ向ヒ、リマン潮ト相逢フニ至リテ、消滅スルモノナラン云々

又其日本島ノ溫度ヲ論ジタル文中ニ云フ、第一月同溫線〔Isothermal lines〕ノ配列ヲ見ルニ、零度線〔攝氏溫度ナリ以下倣之〕北上川地方ノ南ニ起リテ内地ニ入レバ、南ニ向テ彎曲シ、日本海ヲ經テ朝鮮ノ西南端ニ向テ走ル、而シテ其他ノ線モ殆ド之ニ等ク、内地ニ於テハ皆南ニ向テ彎曲セリ、是レ冬期ニアリテハ、太陽地上ヲ照ラスコト斜ニシテ、且短キヲ以テ内地ハ總テ寒烈ナル者ト知ルベシ、而シテ海岸ハ潮流ノ影響ヲ受クルコト少カラズシテ、比較上溫暖ナリ、即西海岸ニハ對馬潮流アリ、東海岸ニハ黑潮アルヲ以テ、同溫線ハ兩海岸ニ於テ著ク北ニ



一月同溫線之圖



七月同溫線之圖

靡ケリ、又茲ニ注意スベキコトハ、朝鮮ノ東海岸ニシテ、此地方ニテモ同溫線ハ北ニ進メリ、故ニ元山邊ハ割合ニ溫ナリ、ハアン氏〔墺國氣象學士〕ハ之ヲ見テ怪メリ、然レドモ近頃佛國軍艦ノ海水溫度ノ測定ニ依レバ、朝鮮ノ東海岸ハ寒冷ナルリマン潮流ヲ受ルコトナク、却テ溫暖ナル對馬潮流ノ北ニ流ル、分岐ヲ受ル者ナリトノ事ナレバ、恐ラクハ之ガ為メ幾分ノ溫度ヲ與フル者ナラン」、第七月ノ同溫線ハ、其屈曲第一月ノ者トハ全ク反對ナリ」、夏期ニ在リテハ、太陽ハ高クシテ地上ニ熱ヲ與フルコト烈シケレバ、內地ハ總テ暑氣酷シク、海岸ハ冷

カナリ、而シテ日本近海ハ、又北方ヨリ來レル潮流ノ影響ヲ感ズルコト少ナカラズ、即太平洋ニ面スル東海岸ニ在リテハ千島潮流親潮アリ、日本海ニハサガレン潮流アリテ冷氣ヲ與フ、又内地ニ於テハ、北部ニ在リテ札幌、南部ニ在リテ大坂近傍ハ、其緯度ニ比シテ殊ニ其溫度高ク、大坂、和歌山邊ハ、九州南部ノ溫度ニ等シ、年平均ノ同溫線ヨリ察スルニ、西海岸ハ東海岸ヨリ溫暖ナルコト、特ニ北緯三十八度以北ニ於テ最モ明ナリ、之ニ反シテ北緯三十六度以南ノ地ニ在テハ、西海岸ハ東海岸ヨリ少シク冷カナリ、斯ノ如ク北緯三十六度邊ノ

以南以北ニ顯然タル區別アルハ、深ク地體ノ構造ニ基キテ、日本島ノ一大彎曲ヲナスガ故ニシテ、諸般ノ事物ニ關係ヲ有スルコト洵ニ大ナリ、此彎曲ノ結果トシテ第一ニハ、北日本ハ滿州ニ遠ザカリ、隨テ寒冷ナルリマン潮流ノ影響ヲ感ズルコト少ナク、對馬潮流ハ彌々其西岸ニ接近スレバ益溫暖ヲ加ヘ、第二ニハ、南日本ノ東南岸ニ沿テ流ル、黑潮ハ、北緯三十六度以北ニ至レバ、北日本ノ東岸ニ遠ザカルハ明ニシテ、自然ニ東ニ轉ジ、北亞米利加ニ向テ流走スルノ傾向アレバ、オコツク海ヨリ來レル千島潮流ハ、之ニ代テ東海岸ニ沿テ流レ、

銚子ノ犬吠岬ニ至ル而シテ北日本ニ於テ高緯度ノ地ニ進ムニ随テ温度ノ減ズルコト、特ニ迅速ナルハ主トシテ此千島潮流ノ影響ニシテ、春夏期ニ於テ其極度ニ達ス、〔中略〕今茲ニ南日本ニテ殆ド同緯度ニ位スル沼津、岐阜、京都、堺、及釜山ノ四季平均温度ヲ擧グレバ、東西海岸内地及朝鮮トノ關係ヲ窺フニ足ラン

	沼津 東岸	岐阜 内地	京都 内地	堺 西岸	釜山 朝鮮
春	十二度八	一度二	十一度五	十一度六	十一度三
夏	二十三度七	二十四度四	二十四度三	二十三度八	二十二度七
秋	十六度七	十五度九	十五度八	一度六	十五度四
冬	五度六	三度二	二度九	四度三	二度二
平均	十四度七	十三度九	十三度六	十三度九	十二度九

之ヲ詳言スレバ、東海岸〔沼津〕ハ、夏期ヲ除ケバ



年平均同溫線竝ニ潮流ノ圖

西海岸〔堺〕ヨリモ高ク、又内地〔岐阜、京都〕ハ、夏期ニ於テハ海岸〔沼津、堺〕ヨリモ暖ク、冬期ニ於テハ海岸ヨリモ寒シ、朝鮮ノ東岸ハ恒ニ日本ヨリモ寒冷ナリ」又各月ノ平均温度ヲ比スルニ各地一月最寒ナリ、但シ北海道ノ根室ニテハ、二月最寒ナリ、而シテ全國中八月ヲ以テ最温ナリトス〔中略〕

一月ニ於テ最モ寒冷ナル所ハ〔北海道最北端ヲ除ク〕札幌ニシテ最温ノ地ハ鹿兒島ナリ、又八月ニ於テ最モ冷涼ナル所ハ〔千島ヲ除キ〕根室ニテ、最モ暖ナル所ハ和歌山、大坂邊ナリ

本邦ノ全土ハ、南北ニ狹長ナル土壌ナルカ故ニ

年中其兩極地ト、中部ノ地方トハ、氣候ニ著キ差違アルコト、已ニ地學上ノ講究ニ於テ顯然タル事ナレバ、更ニ又各地實際ノ狀況ヲ審ニシテ、彼此相比較參考スルコト最必用ナリ

畿內東海ノ氣候

畿內東海ノ二道ハ、四季中和ヲ得テ植物類ノ發生ニ適シ、特ニ東西二京ノ地陽春櫻花ノ美觀ハ他ノ諸道ニ多ク比比ヲ見ズ、然レドモ秋冬ノ期節風强クシテ、動モスレバ、家屋植物等ヲ損害スルノ懼レアリ

山陽ノ氣候

山陽道ハ、前二道ニ比スレバ、一體ニ稍暖和ニシテ常ニ風少ナク、秋冬ノ期ト雖、樹ヲ拔キ屋ヲ發クノ强風ヲ知ラズ、且ツ內海ニ面スル沿岸ノ各

地ハ、嚴冬中ニモ積雪寸餘ニ及ブコト甚稀ナリ、但山陰ニ接スル山間ノ地、之ト相反シ、降雪田圃ヲ埋没シ、道路ヲ壅塞シテ、人馬ノ往來ニ稍困難ヲ極ムルコトアリ

南海ノ氣候

南海道ハ、中央ニ山脈ノ綿亘シタルガ為ニ、其南北ヲ以テ多少ノ異同アルモ、山陽ノ氣候ト大差アルコトナク、唯土佐ノ南方沿海ナル高知地方、及紀伊ノ南海岸各地ノ如キハ、頗ル溫暖ニテ、草木花卉ノ發生等ハ、西海ノ東南地方ト、粗ホ相似タルノ有様アリ

西海ノ氣候

西海道ハ、南北ヲ以テ氣候ノ差著ク異ナル所アリ、西北部ニ面スル筑豐ノ諸國ハ山陽ノ南海岸

ニ比スレバ、稍寒冷ニテ、冬期ハ東北或ハ西北ノ風強ク、海岸ノ地方ニテモ、積雪二三寸餘ニ達スルコト屢ナリ、故ニ炎暑ノ苦熱ハ、山陽地方ヨリ、少シク輕キヲ感ズルガ如シ、之ニ次ギテ東西二肥ノ地ハ稍中和ニ屬シ、薩隅日ノ三國ハ極テ溫暖ニテ、嚴冬ニモ高山幽谷ヲ除クノ外、南方沿海ノ村落中雪花ノ皎景ヲ見ルコト甚稀ナリ、是ヲ以テ山野ノ草木概ネ落葉凋枯ノ秋色ニ感ゼズ、而シテ暑熱モ亦甚酷烈ナラズ、極暑三十三度三四分〔攝氏〕ヨリ、同五六度、六七分ノ間ニ昇降シ、極寒零下四度七八分ヨリ、同五六度ノ間ニ上下ス、南海諸島竝ニ沖繩群島ハ、薩隅ノ陸地ヲ距ル、近

南海諸島ノ氣候

キモノ二三十里遠キハ三百四五十里ニ達スルヲ以テ、以上諸道ノ氣候トハ、更ニ著キ差ヲナシ、大隅ノ屋久島、口之永良部島（共ニ鹿兒島ヲ距ルコト凡三十餘里）等ノ以南漸次ニ溫暖ヲ増シ、大島諸島（鹿兒島ヲ距ル凡八十五里餘）ニ至リテハ、嚴冬中（十二月）本土ノ東京地方ニ比シテ、殆ド三四月ノ中春ノ候ニ相適シ、年中雪ヲ知ラズ、草木凋枯セズ、

沖繩本島ノ氣候

又是ヨリ南方凡九十餘里ヲ隔ツル、沖繩本島、那覇、首里等ノ地方ハ、更ニ溫燠ニテ、本土ノ嚴冬中（予此地ヲ探リシハ廿一年十二月中旬ヨリ廿二年一月上旬）此地ニテハ、黃瓜茄子ノ好時節、蠶豆ノ花盛リニテ、土民ノ勞働スル者、皆單衣或ハ浴衣等ヲ着シ、山野ニハ綠樹青草蓊蔚トシテ、一點

宮古、八重山諸島ノ氣候

ノ冬、景ヲ存セズ、故ニ梅花香ヲ放タズ、櫻花モ笑ヲ呈セズ（梅櫻本土ヨリ移シ栽ユルモ年ヲ次テ皆花ヲナサズ）攝氏ノ寒溫器ニテ十三度八九分乃至十五度五六分ノ間ニ昇降シテ殆ド冬期ヲ見ザルノ有様ナリ斯ノ如キモ、夏期炎暑ノ最高點ハ三十三四度（攝氏）ニ過キズ、是レ常ニ海風ノ爽涼ヲ送ルガ為ニ本土ノ苦熱地方ヨリハ、却テ熱度ノ輕キヲ感ズルガ如シ、又此地ヨリ凡九十里餘、乃至百五十餘里西南ニ在ル、宮古、八重山ノ諸島ハ其溫燠尚一層ヲ加フベキニ似テ、其實際ハ必ズ然ラズ、極暑ノ溫度却テ那覇首里ノ地方ヨリハ稍輕キノ感アリ、然レドモ此諸島ハ支那ノ台灣島ニ接近スルヲ以テ、大

略彼地方同様ノ氣候ヲナシ、常ニ瘴烟癘霧山野ニ瀰漫シ、其蒸燠鬱熱ハ又格別ノ惡氣ニシテ、此氣ニ侵サル、者皆多少ノ病害ヲ受ケザルハナシト云フ、之ヲ此諸島ノ特有病トス

山陰ノ氣候

山陰道ハ夏期ノ溫度山陽地方ト相異ナルナキモ嚴冬ノ候ニハ、全ク是ト相反シテ、常ニ東北或ハ西北ノ風暴クシテ為ニ漁業及海上ノ通船ヲ絶ツニ至リ、山間ニハ雪深ク積リテ耕種ニ便ナラザルノ地多シ

北陸ノ氣候

北陸道ノ諸國ハ、山陰ヨリ又一層ノ寒地ニテ、海上ノ風濤、山間ノ積雪一般ノ住民ヲシテ其業ヲ休息セシメ、行旅ノ客ヲシテ其跡ヲ絶タシムル



東北ノ市邑積雪ノ景

等、南方溫地ノ人ニハ意想外ノ事實少ナカラズ、即越後地方軒下往來ノ設ケ等ハ、氣候ノ為ニ家屋ノ構造、市街ノ廣狹ヲ作為セラレタル者ト云フベシ

東山道ノ諸國

モ亦概ネ是ト同一ノ狀況アリ、特ニ東北諸州ノ如キハ、年中溫暖炎暑ノ氣節甚短クシテ、冷涼寒冽ノ時期頗ル永キニ居リ、降雪ノ期、住民一般ニ屋外耕種ノ業ヲ廢スルコト、通常十二月ノ末ヨリ、翌年三月ノ半ニ至ル迄、大略八十餘日ノ久キ、殆ド氷室穴居ノ有樣ヲナシ、牛馬モ山野ニ秣スルノ地ナク、旅客モ原頭ニ道ヲ問フノ人ヲ見ズ此ノ如キ凜冽タル白世界モ三四月ノ候ニ至リ、太陽ノ慈溫ト地球ノ蒸熱トニ溫メラレテ、漸次ニ其氷雪ヲ融解スルニ當リテ、回陽ハ忽チ地上草樹ノ上ニ發表シ、梅花始テ放香スレバ、櫻桃梨杏亦相次デ皆其蕾ヲ破リ早春ノ景、艷陽ノ觀、一

時ニ輻輳スルノ奇狀ハ又此地ノ一奇觀ナリ

北海道ノ氣候

北海道ハ、本土ノ極北ニ位シ、西南極ノ沖繩ト全ク相反シテ、緯度ノ差ヨリ之ヲ想フモ其寒暖ニ天然ノ殊別アルハ、已ニ人ノ普ク知ル所ナレドモ、從來人ノ唱フル所ハ、皆多ク其極端ヲ擧テ、未ダ其和順平等ノ事ヲ云ハズ、此間ニ於テ往々遺憾アルコト少ナカラズ

本道ハ土壤頗ル濶大ナルヲ以テ、一道ノ內ニモ四邊自ラ其寒暖ヲ異ニシ、渡島、膽振、日高等ノ諸國ハ皆南面ノ地ナレバ、東北海岸ノ他ノ諸國ニ比シテ、稍暖和ニシテ、例年ノ降雪期ハ十一月ノ半ニ始リテ、三月ノ末ニ終リ、積雪ノ量平地一二

尺乃至三尺許リニ止リ、已ニ融解ノ後ハ草木ノ發生殊ニ速ニシテ、山野忽チ新緑ノ景ヲ呈シ、夏期ノ炎熱攝氏ノ二十七八度ヨリ三十度餘ノ間ニ昇降スト云フ

予曩ニ此地ニ至リシ時、函館地方ノ寒威ヲ聞クニ、今ヲ距ル廿年前ニハ、嚴冬中港内(函館)ノ過半堅氷ヲ結ビテ、繫船モ岸ニ近ヅクヲ得ザリシニ、近頃ハ年ヲ追テ暖和ヲ増シ現今ニ至テハ、僅ニ内部ノ沿岸七八間乃至十間許ノ所氷結スルノミ、且ツ市街毎戸永ク雪籠リスルニモ至ラズ、平地ノ積雪ハ漸次ニ氷結シテ、地上白盤ノ觀ヲナシ、此上ヲ往來スル者木履ヲ穿

テ皆巧ニ之ヲ辷リ、或ハ橇ニ跨リテ疾行スル等、冬期ハ頗ル爽快ヲ感ズト云ヘリ、以テ此地人ノ寒威ニ馴レタルヲ知ルベシ

之ニ次デ石狩ノ平野札幌ノ地方ハ大略同様ノ氣候ナレドモ、西北ヨリ東北ニ繞リテ海岸一帶ノ地方ハ、寒威頗ル强ク、海上ノ怒濤、陸地ノ寒風、毎ニ人ヲシテ戰栗セシメ、草木ハ總テ凋枯シテ、降雪ノ期節早ク、凡十一月ノ初ヨリ四月ノ半頃迄積雪山野ニ滿ツルノ有樣ナレバ植物ノ發生モ隨テ遲ク、根室、北見ノ海岸、及千島諸島ノ如キハ就中酷寒ナリ、然レドモ一般通常ノ寒威ハ、本州陸奥ノ地方却テ稍寒冷ナルコトアリト云フ

予初メ私ニ想ヘラク、七八月ノ候、山陰、北陸ヲ巡リテ、宜ク暑ヲ避クベシト、既ニシテ因幡、伯耆、但馬、丹後ノ諸國ヲ周リテ若狹越前ノ地ヲ經ルヤ、時恰モ七月ノ酷暑ニ際シ、日中ノ炎熱途上燒クガ如ク、連日ノ長途其苦ニ堪ヘズ、避暑ノ豫想茲ニ至テ全ク消散シ、南方諸國ノ暑熱ト遂ニ其兄弟ナキヲ悟リシモ、加州山代ノ溫泉ヲ經テ金澤ニ至ルノ途上遙ニ白山ノ積雪ヲ顧望シ、路傍兒童ノ雪（雪ノ稍氷結シタルモノヲ莚或ハ笹ノ枝ニ包ミ各、相攜ヘテ來リ鬻グ）ヲ鬻グノ多キニ遇ヒ、途上ノ渴以テ醫スルニ足リ、夜間ノ冷涼以テ終日ノ苦熱ヲ忘ルベシ、此ニ至テ始テ晝夜ノ暑氣、其

時間ノ長短全ク南方ノ諸國ト相異ナルヲ感ゼリ、尋テ越中ニ入ルヤ、劔岳ノ諸連山悉ク白雪ノ皚々タルヲ望ミ、晨夕ノ冷涼ナルコト、袷ヲ着クベク、夜半衾ヲ脱スベカラズ、加賀能登ヨリ以東ハ、路畔ノ稲田巳ニ穗ヲ發シ花ヲ著クルヲ見ルコト甚多カリキ〔七月下旬〕越後ノ海岸親不知以北ノ沿道ニテハ、冬期海風猛烈ノ現象其路畔ノ樹木ニ顯ハレ、數尋ノ喬木大樹甚稀ニテ、松樹雜木ノ秋梢皆枯槁シテ、一片ノ緑葉ヲ留メズ、樹幹枝條ハ皆南方ニ傾斜シテ、其形狀恰モ敗軍ノ兵卒列ヲナシテ一方ニ奔竄スルガ如シ、故ニ此地方ノ漁村ハ、概ネ海岸ニ

岩石或ハ樹木ヲ以テ障塀ヲ築キ、家屋ハ總テ其内部ニ構フルノ體アリ

八月下旬羽後ノ能代川ノ沿岸ヲ探リシニ、此河畔ニハ、蕎麥ノ田圃頗ル多クシテ、時正ニ花ヲ開キテ積雪ノ觀アリ、其後北海道ヨリ東山道ノ東北諸州ヲ巡ルノ間ハ、本文ニ載スルノ外別ニ感觸スル程ノ事ナク、十月上旬上野ヨリ信濃ニ至ルノ際、碓氷峠ニテハ、滿面ノ樹林已ニ紅葉ヲ為シタルヲ觀、追分村ヲ早發シテ、途上始テ霜ヲ踏ミ、南方八ヶ岳ノ頂上、及西北飛驒、越中ノ連山悉ク皎トシテ一帶ノ冬景ヲ粧ヒ、早寒已ニ肌ヲ徹スルニ至レリ〔西南山陽西海ノ諸

道ニテハ十一月上旬ニモ尚此
景此寒ヲ知ラザルノ地多シ

第三章

人口及戸數

既ニ地形面積ヨリ邦制區畫及山原河海一般ノ氣候等ヲ誌シ畢リタルヲ以テ、是ヨリ更ニ此全土ニ生息スル人口ノ古來ヨリ今日ニ至ル總數ヲ擧テ漸次繁殖ノ比較ヲ審ニシ、又更ニ今日交通スル所ノ外國ノ人口ヲ對照シテ、以テ本邦ノ地學ヲ講究スルノ道路ヲ開カント欲ス

世界中人類ノ最モ多ク繁殖スルノ地ハ何レナル歟、其最モ寡少ナルノ地ハ何レナル乎、而シテ其多少ノ據ル所ハ果シテ土地ノ形勢、氣候ノ因

縁ニ據テ然ル乎、或ハ其地人類ノ自ラ作為スル所ニ因テ然ル乎、是レ地學ヲ講ズルモノヽ最モ注意潜心スベキ所ナリ

本邦太古文獻未ダ備ハラザル時代ハ姑ク之ヲ措キ、我第十三世紀推古天皇ノ時ニ當リテ、始テ全國人口ノ調査（當時如何ナル方法ニ因リシカ、想フニ後世ノ如キ精且詳ナルニ至ラザリシコトヲ知ルベシ）ヲナシタルモノヽ如ク、太子傳（聖徳太子）ニ載スル所ニ據レバ當時全國ノ人口四百九十八萬八千八百四十二人ト云フ、其後第十四世紀聖武天皇ノ朝天平八年ノ調ニハ單ニ八百萬人ト云ヒ、是ヨリ後凡一千餘年ヲ經テ第廿五世紀中櫻町天皇ノ朝延享元年ノ調ニハ二千五百六

十八萬二千二百十人ト云フ、後又十二年ヲ隔テテ桃園天皇ノ朝寶暦六年ニハ二千六百〇六萬一千八百三十人ト云ヒ、尋テ六十餘年ヲ經過シ、光格天皇ノ朝文化十三年ニハ二千五百六十二萬一千九百五十七人ト云ヘリ（之ヲ前計ニ比シテ始テ減數ヲ示セリ）（以上ノ調査ハ内務省第六回國勢一斑ニ拠ル）此調査ハ何レモ其精確ヲ得難キ者ナリトスルモ、假ニ之ヲ當時全國人口ノ概數トナシ、其後僅ニ七十餘年ヲ經テ、明治十八年ニハ、實ニ三千七百八十六萬八千九百四十九人ト云フ、此精確ナル調査ヲ得ルニ至テ、其增額ハ驚クベキ差ヲ生ジ、翌十九年ニハ更ニ三千八百十五萬一千二百十七人ノ現數ヲ出セリ

之ヲ全國ノ面積二萬四千七百九十四方里ニ平均スレバ、一方里ノ人口一千五百四十四人ナリ、尚之ヲ細別シテ左ノ表ヲ作ル

諸道并ニ諸島	面積	一方里ノ人口	諸道并ニ諸島	面積	一方里ノ人口
本土	一万四千五百七十一方里	千九百九十五人	九州	二千六百十七方里	二千〇七十二人
北海道本地	五千〇八十三方里	五十五人	四國	千百八十方里	二千三百二十人
千島 三十一島	千〇十一方里	一人	淡路	三十六方里	五千百四十五人
沖繩 五十五島	百五十六方里	二千三百九十五人	隱岐	二十一方里	千五百八十七人
佐渡	五十六方里	千九百二十六人	壹岐	八方里	四千三百四十三人
對馬	四十四方里	六百八十一人	小笠原島 十七島	四方里	百三十八人

此面積人口ノ平均對數ハ内務省ノ編纂ニ係ル第六回國勢一斑ニ拠ル、其備考ニ云ク、各項ノ面積ヲ合計シテ全國面積ト七方里ノ差ヲ生ズルハ、方里ニ満タザル數ヲ除ク

ニ由ル、人口ハ十九年一月一日調ニ拠リテ算出セシモノナリ、北海道ノ面積第五回國勢一斑ト異ナルハ色丹郡ノ編入換アリシニ由ル

此表ニ據テ全國各地ノ人口ハ、各々其多寡ノ一斑ヲ知ルベシト雖、尚之ヲ各地ノ都邑ニ徴スルニ現時人口二萬以上輻輳シタルモノ總テ五十有三アリ

東京	九十八万二千四十三人	大坂	三十二万四千七百六人	京都	二十四万六千二百三十八人
名古屋	十二万四千五百四十二人	金澤	十万四千五百七十七人	横濱	九万千百四十六人
廣島	七万九千三百三十三人	德島	六万二千八百五十九人	神戸兵庫	六万千三百四十九人
仙臺	五万五千百九十五人	鹿兒島	五万四千五百七十九人	和歌山	五万四千五百十一人
冨山	五万三千百二十三人	長崎	四万七千七百九十人	堺	四万六千三百十五人
高松	四万五千二百四十二人	函館	四万四千二百六十九人	高知	四万四千二百七人

熊本 四万二千五百十二人	福井 四万二千百三十六人	萩 四万一千百三十五人
新潟 四万。。三十八人	静岡 三万五千七百六十七人	鳥取 三万三千七百九十六人
岡山 三万三千四百二十四人	米澤 三万三千。九十人	秋田 三万一千四百六十九人
弘前 三万一千百九十四人	長岡 三万。七百四十人	撫養 三万。百七十三人
松山 三万。。七十五人	盛岡 二万九千三百五十四人	松江 二万八千二百九十一人
那覇 二万七千八百八十五人	銚子 二万六千七百七十人	博多 二万六千四百九十一人
赤間關 二万五千四百六十三人	高田 二万四千七百九十五人	佐賀 二万四千六百八十八人
首里 二万四千六百十九人	宇都宮 二万四千五百四十七人	津 二万四千三百四十六人
山形 二万三千八百。三人	高岡 二万三千七百八十二人	彦根 二万三千六百五十人
姫路 二万二千九百六十人	久留米 二万二千八百七十八人	奈良 二万二千七百三十四人
新湊 二万一千五百九十九人	伏見 二万一千三百七十人	鶴岡 二万一千。四十九人
山田 二万。四百六十七人	前橋 二万。三百十六人	

其他人口二萬以下ノ都邑ハ、各國其地ニ就キテ之ヲ詳ニス

以上全國人員ノ住居シタル現在ノ戸數ハ七百七十二萬七千六百十戸ナリ（十九年一月ノ調査以上ノ戸數人口共ニ皇族以上ハ之ヲ算入セズ）

外國人口比較

清國	三億八千二百九十七万八千八百四十人	露西亞	八千七百八十五万四百九十人
北米合衆國	五千四十九万七千五十七人	獨逸	四千六百八十五万二千四百五十人
佛蘭西	三千八百二十一万八千九百三人	英吉利	三千六百七十万七千四百十八人
伊太利	二千九百六十九万九千七百八十五人	西班牙	一千六百九十五万八千百七十八人
朝鮮	一千五十二万八千九百三十七人	白耳義	五百八十五万三千二百七十八人
和蘭	四百二十七万八千二百七十二人	瑞西	二百九十万六千七百五十二人

布哇	八万五百七十八人

人種風俗及生計

本邦ノ住民ハ、純然タル亞細亞人種ニシテ、其形體歐米ノ人種ニ比スレバ、一般ニ短小ニシテ頭髮純黑、鬚髯少ク、其性機敏ニシテ勇壯ナリ、且古來能ク忠孝ノ道ヲ守リ、他人ニ接スルノ情誼頗ル惇厚溫和ナリ

品類四等ニ分レ、皇族、華族、士族、平民ト云フ、華族以上ハ一般ノ上流ニ位シ、累世ノ天皇ハ皆皇族ヨリ出デ、尊嚴侵ス可カラザルモノトス、華族ハ、古來永ク皇家ニ奉侍シタル、門閥ノ舊家或ハ封建時代各〻一地方ニ割據シテ大名ト稱シタル、所

謂ル豪族ヨリ成リ立チタル者、其多キニ居リ、其他ハ國家ニ顯著ノ功績アリテ、新ニ華族ニ列セラレタル者等ナリ、士族ハ概ネ舊時大名、豪族ノ從臣家來ト稱シタル者ニテ、武政ノ頃多少ノ俸祿ヲ受ケテ、常時兵籍ニ在リタル所謂ル武士ノ族ナリ、平民ハ、農商工其他種々ノ事業ニ渉ル一般ノ衆庶ヲ總稱シ、全國ノ人口中ニ於テ其最モ多數ヲ占メタル者トス

以上ノ四族中皇族ヲ除クノ外ハ、大略其品位ト貧富トニ因リテ、自然ニ其生活ノ度ヲ異ニスト雖、結婚、葬祭、吉凶弔賀ノ禮ニ至リテハ一般相通ジテ少シモ懸隔ナク、特ニ士民ノ間ハ唯其名稱

ノ異ナルノミニテ、其權利義務ヨリ、公私ノ交際ニ至ルマデ皆平等ニシテ、公共ノ諸税モ亦皆其負擔ヲ同クセリ

衣服髮容ハ、古來ヨリ最モ複雜ノ國柄ナルニ、近時西洋ノ風俗傳來セシヨリ益其錯雜ヲ極メ、都鄙村邑各〻貧富ニ因テ其趣ヲ異ニシ、法制ノ定ムル儀禮體制ノ外ハ、其何レカ是、何レカ非ナルヲ問ハズ、甲擬シテ乙摸シ、昨行ハレテ今止ミ、其流行興廢ノ速ナル事、一般ノ經濟得失ハ姑ク之ヲ措キ、靜ニ此當時ノ現象ヲ顧レバ、一驚一歎遂ニ其底止スル所ヲ知ラザルノ畏レアリ、風俗ノ矯整ニ志アル人士、其奏功ノ日ハ將タ何ノ時ナル乎」

東京紳士及中等市民風俗ノ圖



東京ノ上流紳士貴人ハ概ネ身ニ洋服ヲ着ケ、頭ニ高帽ヲ戴キ、足ニ美麗ノ靴ヲ穿チ、出ルニ馬車、腕車ノ備ヘアリ、入ルニ鐵門煉瓦ノ層樓アリ、金欄玉堂ノ内ニ起居シ、滋養ノ

膏味ニ飽キ、眷族相娯樂シテ又憂フル所ナキガ如シ、中等以下ノ士民ハ何レカ富、何レカ貧、其家屋ノ製、服飾ノ容、各其好ム所ニ隨ヒ、或ハ歐米ノ製アリ、或ハ歐和ノ中製アリ、或ハ純然タル和容アリ、其形狀千種萬態ニシテ、複雜極リ

學生及下等市民ノ風俗



東京市街ノ圖



ナシ、唯其學生ノ態様、下等市人ノ形狀、一見シテ粗其觀定ヲ誤ラザルノミ

市區家屋ノ構造ハ樞要ナル區域（日本橋、京橋ノ二區及芝、神田、下谷淺草等本道ノ通區）ヲ除クノ外概ネ一定ナラズ、高厦美閣ノ間隘小粗造ノ小

店相連綴セルアリ、隨テ街衢モ亦縦横交錯シテ、頗ル狹隘ナルアリ、然レドモ一般ニ掃除行屆キ、至ル所清潔ナラザルハナシ、但風暴ク人多キ土地ナレバ、街頭ノ風塵常ニ烟霧ノ起ルガ如ク、往來ノ子女俄ニ面ヲ覆ヒ、裳ヲ褰グルノ憂ヒアリ」市民ノ人情ハ概ネ怜悧ニシテ機敏ヲ貴ビ、舊來豪俠ノ氣槩尚少シク存スルモノアリ、飲饌ハ總テ膏粱甘味ヲ好ミ、專ラ能ク蕎麥ヲ嗜ム、〔東京蕎麥ノ名アリ、又能ク鰻ノ蒲燒ヲ好ム〕商賈ハ一般ニ繁華ヲ極メ、百貨ノ流通滑カニシテ、人事ノ匆忙ナル事、本邦大都ノ名ニ背カザルガ如シ

京都ハ、一般ノ風俗何トナク閑雅ニテ、舊風尚脱セズ、所謂ル都振（ミヤビ）ノ優暢ト云フベキ有様ヲナシ、市街家屋ノ構造モ、總テ舊體ヲ改メズ、錬瓦造リノ層樓ヲ見ルコト甚稀ナリ、然レドモ街衢ハ一條ヨリ七條ニ至リ、四通端正ニテ、大社

京都ノ風俗



巨刹各所ニ碁布シ、千有年來ノ舊蹟、今尚依然トシテ存スルモノアリ、宮城殿閣ノ優雅宏麗ナルハ、皆以テ疇昔ノ一斑ヲ覘フニ足ルベシ、單一ニ之ヲ云ヘバ、本邦人文ノ古體ヲ集メテ、之ヲ中央ノ一都ニ保存シタル、活歴史ノ一觀場ト評スベキノミ

人情ハ總テ溫和ナレドモ、内節儉ヲ務メ、外服飾ニ奢ルノ弊アリ

大坂ハ東京ニ亞ギタル本邦第二ノ都會ニテ、地勢淀川ニ沿ヒ、西南ハ海ニ面シ、水陸ノ運漕至便ノ地ナレバ、隨テ市街ノ商況モ殷盛ヲ極メ、街衢ハ概ネ狹隘ナレドモ、紳士豪商ノ徒頗ル多ク、其

要區（心齋橋筋、高麗橋通リ等）ニ當リテハ、高樓大廈、軒ヲ聯ネ、倉庫相櫛比シテ水涯ニ皎々タルハ實ニ關西ノ大都ニ耻ヂザルガ如シ

市人ハ概ネ優柔ノ聞エアリシモ、近時大ニ其聲價ヲ囘復シ、最モ商

大坂市人ノ風俗



責ニ熟シ、忍耐能ク其機ニ投スルヲ務ム、唯其人情ハ惇厚ニ乏シクシテ、輕浮ヲ多シトス
生活ノ程度ハ、二京ト相通ジ、皆本邦現時ノ一般ニ對シテ、上等ノ地位ニ在リ
關東地方田舍ノ家屋ハ、往々解圖ノ如ク、屋上ニ菖蒲ヲ栽培シタルモノアリ、初夏ノ花候ニハ至極雅致アルガ如キモ、花萎レ葉枯レタル季節ハ、左ナキダニ見苦シキ茅屋ノ一層體惡クコソ見受ケラルヽナレ
北陸及東北地方ニテハ、市邑村落中、瓦葺ノ家屋甚稀ニシテ、多クハ小板葺ナリ、其屋上ニハ總テ小石ヲ載セタルコト解圖ノ如キ有樣ヲナセリ、

關東及北陸地方田舍ノ家屋



是レ冬季風强ク、積雪多キガ故ナリト云フ

常州鹿島郡ノ羽崎及下總ノ銚子港等ノ人家ハ、概シテ矮小ナル構造ニテ、小板葺ノ上ニ牡蠣殼、及貝殼ヲ堆積シタリ、遠望スレバ白堊ノ美屋櫛比シタ

ルノ景アリ、近ヅクニ隨ヒ、其實況ヲ見テ更ニ一驚スルニ至ル

其他各地村落ノ家屋構造ハ、各〻其地其國ニ據リテ、多少ノ異同アルモ、之ヲ概説スレバ、本邦田舍ノ家屋ハ各地同一ト云フモ敢テ不可ナカルベシ、唯北海道土人ノ家屋、及沖縄諸島村落ノ如キハ、本土ニ於テ未多ク其比ヲ見ザルノミ即チ解圖中(a)ハ北海道土人ノ家屋(b)(c)ハ、沖縄諸島村落ノ景ナリ

(a)ハ、所謂ル堀建家ト稱スルモノニテ、本州太古ノ家屋構造ト、稍相似タルガ如ク、數本ノ木ヲ束ネ、其根ヲ土中ニ建テ其上ニ萱茅萑葦ノ類ヲ纏



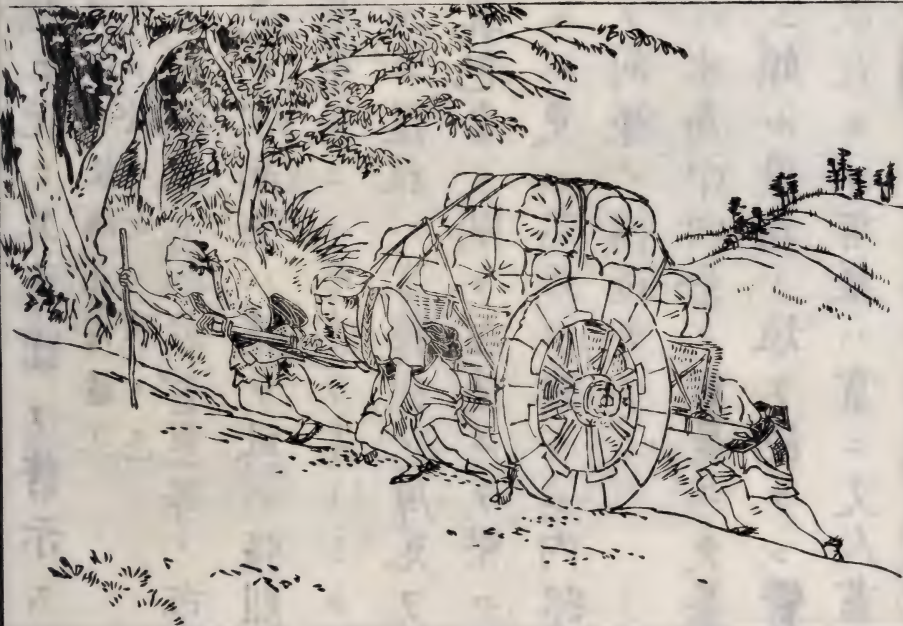
ヒテ、風雨ノ防ギヲ為シタル迄ニテ、家中床ヲ設ケズ、土盤ニ莚（アツシニテ製シタルモノ）或ハ萱茅等ヲ布キ、其上ニ起臥ス、實ニ穴居同様ナリ、屋外周圍ノ垣ニ獸類ノ髑髏ヲ懸ケタルハ、食料ニ充テタル盛況ヲ示シ

テ、暗ニ他ニ其勇猛ヲ誇示スルモノ、如シ、（土人ノ状況ハ後編北海道ノ部下ニ於テ之ヲ詳ニス）

(b)ハ、沖縄本島、那覇首里等ノ市街ニ在ル家屋ノ一景ナリ、南島ハ總テ風ノ强烈ナルガ為ニ、一般ニ皆低屋ニテ、堅牢ヲ主トシタル粗造ナル木製ナルニ屋根ハ赤樺色ノ厚瓦ヲ以テ、二重葺ニナシ、其包合ノ間ヲ白堊ニテ堅ク塗リ埋メ、家ノ周園ニハ更ニ石垣ヲ繞ラシ、内部ハ本州ノ農家ト殆ド同様ノ構造ナリ

(c)ハ、本島中田舎ノ家屋ニテ、甚狹隘ナル構造ナルニ、頗ル優雅ノ垣ヲ繞ラシ、鬱蒼タル樹木ノ間ニ散在セル有様ハ實ニ文人畫ノ實景ヲ觀ルガ

大津地方ノ婦女力役ニ從事ス



如キナリ

本邦ノ風俗ヲ通論スレバ、現今中等以上ノ人、及一般ノ商人ハ、何ノ國、何ノ地ヲ問ハズ、大略同様ニテ甚シキ差違ヲ見ズ、獨リ農家及他ノ力役ニ從事スル者ハ、東西國變リ、地隔タルニ隨

婦女ノ物ヲ運搬スル圖



ヒ、各地其服裝體容ヲ異ニスルノ有樣アリ」山城、近江、伊勢ノ諸國及關東、東北地方ノ人ハ、女子ノ力役ニ從事スルコト男子ニ讓ラズ、又山陽西海等ノ諸國ニテモ、海岸或ハ島

嶼ニ住居スル漁者ノ婦女ハ、皆男子同様ノ力役ニ就ク者アリ、特ニ沖繩諸島ニテハ、男逸女勞ノ稱アルガ如シ、（沖繩諸島ノ事ハ後編ニ詳ニス）又京都大坂ヨリ以東以北ノ人ハ、物ヲ運搬スルニ概ネ其背ニ負ヒ、其以西ノ人ハ、專ラ肩ニ擔フノ風習アリ又國ノ東西ヲ問ハズ、總テ南部海岸漁人ノ婦女、及京都近傍ノ農女ハ、往々頭上ニ物ヲ戴クノ習ヒアルガ如シ

未開野人ノ風習トシテ、自ラ身ニ黥スルノ弊ハ、南北其俗ヲ同クシ、北海道土人ノ婦女（少女ノ頃ヨリ漸次ニ黥スルモノアリ）ハ面部即チ脣ノ周圍、及左右ノ手背、二ノ腕等（男子モ亦稀ニ手背肩等ニ僅ニ其状ノ文ヲ黥スルアリ）ニ黥シ、西南

文身ノ風俗



諸島、及沖縄島人ノ婦女等モ亦左右ノ手背、及指背ニ黥ス其紋容種々アリ、十七八歳ノ少女ヨリ漸次ニ増黥シ、老婦ハ指手ノ背ニ滿チテ、第二ノ腕ニマデ及ボセリ、是等ノ風

習ヲ見テ、痛ク其曚昧ニ歎息スル程ナルニ、古來ヨリ東京市人ノ力役者中ニハ、其文身ノ粗密彩色ノ如何ヲ以テ互ニ相誇ル者アリ、文化ノ今日ニ至リテ、尚依然トシテ此弊ノ存スルヲ見ル、獨リ東京ノミナラズ、京都、大坂地方ニモ亦往々此異狀ノ風俗ヲナス者アリ（以上ハ皆現行法令ノ禁制スル所ナレドモ尚陰密ノ間ニ之ヲ施スト云フ）

本邦現今普通ノ衣服ハ、綿織ヲ多シトス、絹綿交織之ニ次ギ、絹、紬、綾羅ノ類ヲ用フルハ、中等以上ニ多クシテ、以下ノ者ニハ甚少ナシ、或ハ僅ニ其一部ヲ兼用スルノミ、（綿服ニ絹羽織ヲ着クルノ類）毛織ノ類ヲ服スル者ハ都邑ヲ除クノ外、僻陬村落中ニハ甚

東北西海ノ風俗



稀ナリ近江、若狭、信濃、越中、越後、諸國ノ山村、及東北地方ノ農民ハ男女通ジテ窄袖ノ衣、窄裾ノ袴ヲ穿ツ者多ク、其製或ハ麻布ヲ用フルアリ、或ハ綿布ニテ淺青、紺色等ニ染タルアリ、其形状ニハ

多少ノ異同アルモ、皆勞働ノ便利ヲ圖ルニ原キ、且ツ袴ハ嚴冬積雪中ノ行歩ニ最モ便ナリト云フ、故ニ東北ニテ雪袴ノ稱アリ（方言ニ「モツペ」ト云フ）

西海道各地方ノ農民ハ概ネ

北海道土人沖縄島人ノ風俗



筒袖製ノ綿服ヲ用ヒ、〔貧民ハ襤褸ヲ綴リテ製スルアリ〕男子ハ多ク股引ヲ穿ツ

北海道土人ハ概ネあつし〔ヲヒヤウト云フ木ノ皮ニテ織リタル粗キ麻布様ノモノ〕ノ衣ヲ服シ、兼テ獣皮ヲ用フ、其製窄袖ニテ、身幅濶キモノヲ或ハ左衽ニシ、或ハ右衽ニス、一定ナキガ如シ

沖縄諸島ノ人ハ専ラ麻布、綿布〔飛白地ノモノ多シ〕ノ服ヲ着、或ハ上布、芭蕉布等ヲ用フルモアリ、其製總テ濶袖濶身ノ單衣ニテ、長ケハ概ネ膝ヲ限ル〔上等士族ノ徒ハ等身ノ服ヲ着ケ草履木履等ヲ穿ツ然レドモ一般下等ノ人民ハ皆露脛徒跣ヲ常トス〕女ハ一般ニ其上ニ同様ノ上衣ニシテ長身ノモノヲ着クルヲ常トス、是亦左衽右衽ノ別ヲ見ズ

男子ノ髮様



髮様ハ、全國一般男子ハ散髮ノ者多シ、但山村海島等偏鄙ノ人ハ、尚往々半髮椎髻ノ者ヲ見ルコトアリ、特ニ東陬北僻、及西南諸島中ニ此類ノ者多シ

沖繩諸島ノ男子ハ、兩簪〔士族以上ハ銀製平民ハ鍮製或ハ鐵製ヲ用フ〕ヲ用ヒテ、束纏スルヲ一般ノ

女子ノ髮樣



風俗トス〔近時小學生徒中ニハ往々散髪ニ改メタル者アリ〕

北海道土人ハ、男女共ニ總テ斷髮ヲ長ク肩ニ垂レ、鉢巻〔木綿ノ襤褸ニテ製シタルアリ或ハあつーノ類ニテ組ミタル帯狀ノモノ〕ヲ結ビテ之ヲ纏ヘリ

女子ノ髮ハ、全國各地其體ヲ異ニシテ、千種萬形紛雜辨ジ難キニ至ル、解圖ノ示ス所ハ其一斑ニシテ最モ識別ニ易キモノヲ擧グ、其他ハ同形ニシテ、大小アリ、位置ノ高下アリ、恰好ニ大同小異アリ、悉ク之ヲ詳ニスル能ハズ

飲食ハ一般ニ通論シ難ク、貧富ニ由リテ大差アリト雖、今其多キニ就キテ之ヲ總括スレバ、本邦人ハ總テ米、麥、菜蔬、魚鳥獸ヲ常食トシ、清濁酒及

焼酎煎茶ヲ嗜ム、其米麥ヲ炊キ、菜蔬ヲ煮、或ハ之ヲ鹽漬ニスル等、其方法頗ル簡易、鳥獸ノ肉ヲ煮、或ハ之ヲ羹炙ニスルニハ、極テ精熟ヲ主トシ、魚類ハ專ラ膾ヲ好ム

三府五港ノ地、及其他ノ都邑ハ概シテ飲食ノ度高キニ居ルモ、山間、海濱、及島嶼偏陬ノ地方ニ至テハ其度頗ル卑低ヲ極メ、殆ド見聞ニ堪ヘザル者アリ

東山道、飛驒、信濃等ノ深山幽谷ノ人民、及東北諸州偏陬ノ地方ニ住居スル、下等農民ノ生活ハ實ニ憫ムベキ有樣アリ、其身ニハ年中襤褸ヲ纏ヒテ、僅ニ寒暑ヲ凌ギ、其常食ハ稗、麥、粟、大根、菜葉、等

山間人民ノ生活

ノ混炊ニテ、或ハ蕎麥粉ノ餅、馬鈴薯、里芋等ヲ雜食シ、甚シキハ夏秋ノ候、唯桃、栗、橡、柏ノ實等ヲ食スルニ止リテ、米麥ノ飯、魚介ノ滋味ヲ知ラザル者アリ

西海道、肥後、日向、薩摩等諸國ノ山村モ、亦殆ド之ト同様ノ狀況アリ、特ニ日向ノ西北部山間ノ人ハ、玉蜀黍ヲ上食トシ或ハ小豆、蕎麥ノ類ヲ以テ日常ノ食ニ充テ、粟、麥ヲモ得ルニ至ラザル者アリト云フ

沖繩諸島及、大隅南島ノ島人ハ皆甘薯ヲ常食トシ、蘇鐵ヲ以テ其乏キヲ補ヒ、好テ豚ヲ食シ、最モ火酒ヲ嗜ム

予曩ニ沖繩諸島ニ至リテ、島民ノ蘇鐵ヲ食フヲ聞キ、初單ニ其實ヲ食フ者ト想ヒ、後ニ其幹ヲ食フヲ聞キテ始テ奇異ノ思ヲ起シ、因テ遂ニ其製法ヲ詳ニスルヲ得タリ

蘇鐵ヲ食料ニ製スル方法

蘇鐵ノ實ヲ收穫スルハ、九十月ノ候トス、一本ニ平均二外五合ヲ收穫ス（隔年結實ノモノニテ大島諸島共ニ沖繩群島中ニハ雌蘇鐵少ナキガ故ニ實ヲ穫ルコト甚難シト云フ）雄蘇鐵一萬本ニ雌蘇鐵一本ノ比例ニテ雌蘇鐵ヲ得ルコト甚難シ、若シ能ク雌蘇鐵百本ヲ栽種スルヲ得バ、豊ニ家計ヲ經營スベシ、實ヲ製スルニハ、一顆ヅヽ、刄物ニテ切リ割リ、外皮ヲ去テ日光

ニ四五日間乾シ、之ヲ水ニ浸シ、四五日放置スレバ、液汁發散ス此時水中ヨリ取リ出シ、再ビ日光ニ乾燥シテ細粉ト為ス、粥、味噌燒酎、澱粉等其利用種々ナリ、滋養ノ効米麥ニ亞グト云フ

幹ハ成熟ノ期ヲ凡陰曆ノ三四月トス、之ヲ製スルニハ、先ヅ幹ノ廻リ一尺三寸、長二尺許（山野ニ苗ヲ植テ五年乃至七八年ナルモノ）ナルヲ土中ヨリ切リ取リ、葉ト外部ヲ削リ去リ、厚サ三分許リヲ輪切ニシテ、凡五六日間、莚或ハ板上ニ撒布シテ日光ニ曝シ、之ヲ貯藏スルナリ、食セントスルニハ桶或ハ壺ニ入レ、水ニ浸シテ四五日間放置シ、

漸ク臭氣ヲ發散シテ、稍腐爛セントスル時取揚テ一日間日光ニ乾シ、尚濕分アルモノヲ俵又ハ莚ニ包藏シテ空氣ノ流通セザル所ニ凡八九日間放置スレバ、黒色或ハ赤色ノ黴ヲ生ズ、即チ之ヲ取リ出シ、清水ニテ洗滌シ笊籬ノ類ニ盛リテ姑ク置キ、水分ノ去ルヲ待テ臼ニ容レ、搗碎キテ細粉ト為シ、粉一升ニ白米五勺ノ割合ニテ能ク之ヲ攪混シテ粥ニ作ル（以上ノ手數ヲナスニ注意ヲ怠レバ毒氣脱セズシテ動モスレバ中毒ニ罹ルコトアリト云フ）幹ヲ製スルニ通シテ三種ニ分ツ、心、肉、爪ト云フ、然レドモ前記ノ如キ幹ノ廻リ一尺三四寸ノモノハ概ネ此種類ヲ別タズ、幹ノ肥大ナル

モノハ、必種別シテ製スルヲ可トス
心ハ、肉ヲ去リ、幹ノ中心小部分ノ所ヲ云フ、心ヲ製スルニハ、日光雨露ニ曝シ、數日間ヲ經テ能ク乾燥シタル者ヲ臼ニ容レ搗碎キテ粉末トナシ、之ニ水ヲ注ギ、笊籬ノ類ニ麻布又ハ綿布ヲ布キテ漉過シ、五六時間ヲ置キ、粉末ノ桶底ニ沈定スルヲ待テ上水ヲ去リ、清水ヲ注入シテ前ノ如クスルコト數回ナル時ハ、純白ナル澱粉ヲ得ルナリ、之ヲ日光ニ乾シテ貯藏ス、頗ル上品ニシテ菓子ニ製スベク、又葛粉ニ代用ス
爪ハ外部ヲ削リテ肉ニ達スル迄ノ間ヲ云フ、

製法ハ幹ト同一ニシテ、食スルニ粥ニ作ルコトモ亦同一ノ法ニ據ル、此質ハ最モ下等ニ位スルモノナリト云フ

北海道ノ土人ハ、專ラ山獸海魚ヲ以テ常食トシ近時少シク耕耘ノ利ヲ知リテ、時ニ麥稗ノ穀類ヲ食スルニ至レリ、之ヲ我全國中最下等ノ野民トス

第四章

土地

全國ノ土地反別ヲ分テ官有民有ノ二類トシ、更ニ之ヲ分テ官有地ヲ四種トシ、民有地ヲ二種トス、官有地ノ第一種ハ、皇宮地（皇居並ニ離宮等ノ所在地）神地

（伊勢神宮、山陵、官國幣社、府縣、及民有ニアラザル社地ヲ云フ）ト稱シ、地租ヲ課セズ地方税ヲ賦セザルモノヲ云フ、此反別凡四萬四千八百餘町

第二種ハ皇族ノ賜邸地及總テノ官用地（官、院、省、寮、府、縣、本支廳、裁判所、警視廳、海陸軍本分營、其他政府ノ許可ヲ得タル所用ノ地ヲ云フ）ニシテ地租ヲ課セズ、地方税ヲ賦セザルモノ此反別凡三萬三千三百餘町

第三種ハ、山岳丘陵、林藪原野、河海湖沼、池澤溝渠、堤塘道路、田畑屋敷等、其他民有地ニアラザルモノ、鐵道線路敷地、電信架線柱敷地、燈明臺敷地、各所ノ舊蹟名區、及公園等民有地ニ非ラザルモノ、人民所有ノ權利ヲ失ヒシ土地、民有地ニ非ラザ

ル堂宇敷地、竝ニ墳墓地、行刑場等ニテ、地租ヲ課セズ、地方税ヲ賦セザルモノ（但シ人民ノ願ニヨリ、右地所ヲ貸渡ストキハ、其間借地料ヲ納メシムベシ）此反別凡一千七百六十四萬五千餘町

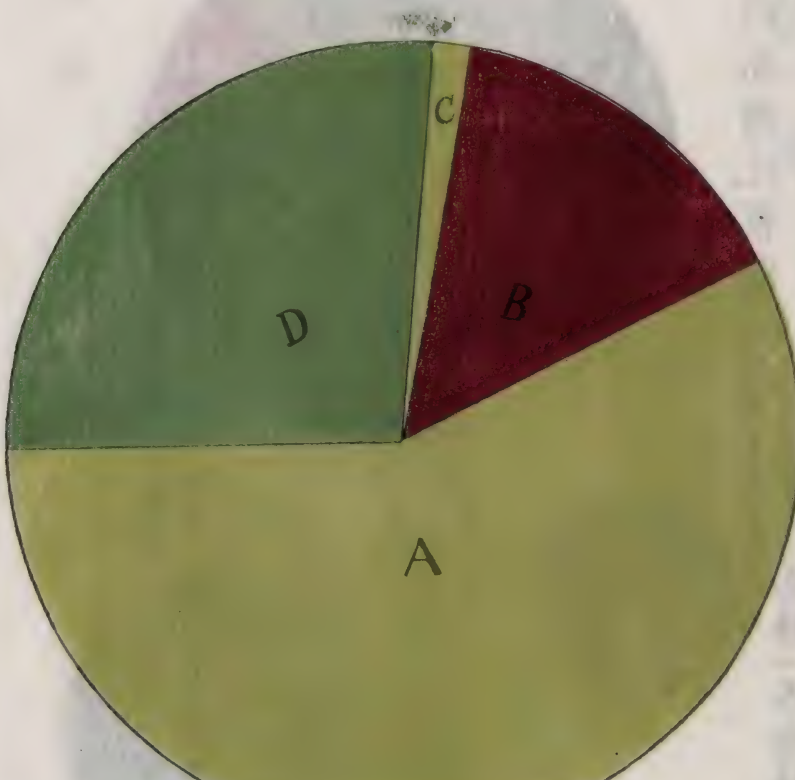
第四種ハ寺院、大中小學校、説教場、病院、貧院等民有地ニ非ラズシテ地租ヲ課セズ、地方税ヲ賦セザルモノハ、此反別凡二百八十町ニテ、以上官有地ノ反別總數ハ凡一千七百七十二萬三千五百餘町歩アリ

民有地ノ第一種ハ、人民各自所有ノ確證アル耕地、宅地、山林數人、或ハ一村、或ハ數村所有ノ確證アル學校、病院、郷倉、牧場、秣場、社寺等官有地ニ非

ラザル土地（但此地賣買ハ、人民各自ノ自由ニ任スト雖、潰地或ハ開墾等ノ如キ大ニ地形ヲ變換スルハ、官ノ許可ヲ請フヲ法トス）ニテ地租ヲ課シ、地方税ヲ賦スルモノ、此反別一千三百七萬八千四十八町歩（此地價十六億四千六百九十一万九千九百圓ニテ、平均一町歩ノ地價百二十六圓）

第二種ハ、官有ニ非ラザル郷村、社地、及墳墓地、民有ノ用悪水路、溜池敷地、井溝敷地、竝ニ公衆ノ用ニ供スル道路等ニテ（但其地形ヲ變換スルトキハ管轄廳ノ許可ヲ請フベシ）地租、地方税ヲ賦課セザルモノ、此反別ハ其正數未詳カナラズ、以上民有地ノ現數一千三百七萬八千四十八町歩ノ内ニテ、更ニ之ヲ細別スレバ（沖縄群島及伊豆七島、小笠原島ヲ除ク）

大日本全土地目別面積比較圖



A 官有地

B 民有田圃

C 民有雜地

D 民有山原

本圖ハ內務省編纂ノ國勢一斑ニ載スル所ノ官民有地目別面積ニ拠ル
但沖繩諸島伊豆七島及小笠原島ヲ除ク

地目別面積比較圖



本圖ノ面積ハ各府縣統計書ニ據ル

農產物產出高比較圖

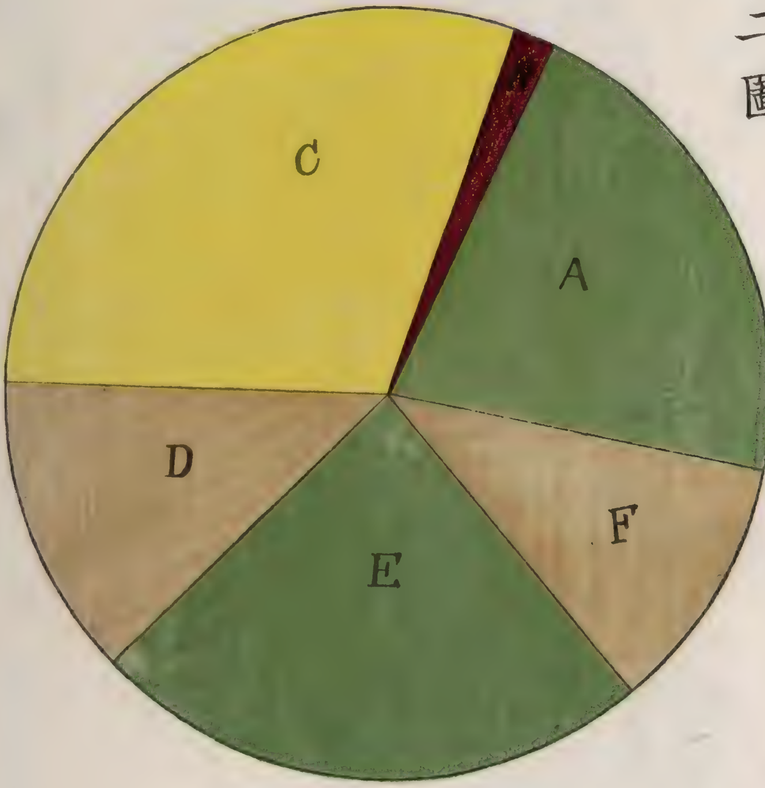
第一圖



A……米
B……稗
C……粟
D……蕎麥
E……麥
F……菜種
G……大豆
H……小豆

第一第二圖共ニ明治廿年内務省編纂ノ國勢一斑竝ニ廿一年農商務省統計表ニ拠ル

第二圖



A……藍
B……蠶絲
C……實綿
D……製茶
E……製糖
F……煙草

田　二百六十四萬九百八十五町歩
圃　百八十八萬五千九百九町歩
郡村宅地　三十三萬四千八百九十七町歩
市街宅地　一萬九千六百十八町歩
山林原野　八百十七萬五千三百二十九町歩
鹽田　五千四百町歩
鑛泉地　二町歩
池沼　八千八十二町歩
其他網干場、鰯干場、濱地、舟揚場、荷揚場、造船場、流木置場、布晒場、物置場、土揚場、稲干場、海岸砂地、土取場等、總テ七千八百二十六町歩
之ニ因テ之ヲ觀レバ、全國ノ民有地中其境域ノ

廣大ヲ占メタルハ、山林原野ニシテ田圃ハ僅ニ其二分ノ一ニ居リ、而シテ其地價ノ高點ヲ有シタルハ、獨リ田地ヲ以テ第一等トシ、其高凡十二億一千四百二十六萬餘圓ニテ、圃地ノ地價之ニ次ギ凡二億六千六百三十二萬餘圓、田圃ノ總計凡十四億八千餘圓ニ達シ、山林原野ノ地價ハ之ニ反シテ殆ド其五十六分ノ一、即二千六百五十餘萬圓ニ過ギス

農業

本邦從來ノ農事ハ、專ラ米麥ヲ收ムルヲ以テ主トナシ、桑麻果實家禽牧畜等ニ勉ムル事ハ頗ル冷淡ニテ、未曾テ其收利ヲ講究セザルノミナラ

ズ、一般ニ之ニ從事セント欲スルノ思想ニ乏シカリシモ、近時此業ノ漸ク進ムニ隨ヒ、氣候ヲ按シ地質ヲ圖リテ、各地稍其適當ナル分業農事ニ注目スルニ至リシハ、我國ノ興産是ヨリ増進スルノ端緒ト云ハザルヲ得ズ

本邦ノ土壤ハ概ネ膏腴ニシテ、瘠鹵磽确ノ地甚尠ナク、畿内ノ攝津、東海道ノ武藏、下總、伊勢、常陸、尾張、上總、東山道ノ羽後、信濃、近江、羽前、美濃、陸前、岩代、下野、陸奥、磐城、北陸道ノ越後、越中、越前、山陽道ノ播磨、安藝、南海道ノ讃岐、紀伊、伊豫、西海道ノ肥前、肥後、筑前、筑後ノ米ニ於ル、各一國ニシテ五十萬石以上、乃至二百餘萬石ヲ出ダス〔諸道ハ順序ニ拠テ〕

之ヲ擧ゲ、國ハ石高ニ原キテ順序ヲ定ム、以下皆之ニ倣フ〕

東海道ノ武藏、常陸、下總、尾張、三河、甲斐、相模、伊勢、上總、東山道ノ上野、下野、陸中、美濃、信濃、陸前、山陽道ノ播磨、備中、備後、安藝、周防、南海道ノ讃岐、伊豫、阿波、紀伊、西海道ノ肥後、肥前、豐後、筑後、筑前ノ麥ニ於ル、又各一國ニシテ二十萬石以上乃至百五十餘萬石以上ヲ出ダス

養蠶ノ盛ナルハ、上野、信濃ヲ以テ第一等トシ、岩代、武藏、近江、甲斐、磐城、陸前之ニ次ギ、其他羽前、美濃、加賀、越後、丹波、飛驒、越中、但馬、相模、羽後、丹後ノ諸國皆有名ノ養蠶地ニテ、繭〔繭、玉繭、屑繭、出殻繭〕及蠶絲〔生絲、熨斗絲、屑絲〕ヲ出ダスコト最盛ナリ

製茶〔碾茶、玉露、煎茶、番茶、紅茶等〕ノ多額ナルハ、加賀、山城、伊勢、遠江ヲ以テ第一等トシ、每國各四十萬貫以上、乃至五十萬貫餘ヲ出タシ、駿河、大和、美濃、土佐、武藏、筑後、近江之ニ次グ、是又各一國ニシテ二十萬貫以上乃至三十餘萬貫ヲ出ダシ、其他日向、肥後、越後、三河、下總、丹波、紀伊、豐後、肥前、常陸、播磨、周防、伊豫、大隅、美作ノ諸國、又皆產茶屈指ノ土地ト稱スルニ足ルベシ

綿花ヲ出ダスノ多キハ、尾張、三河、攝津、河內ヲ第一等トシ、常陸、和泉、伯耆、備中、安藝、備後之ニ次ギ、其他ハ讚岐、播磨、大和、美濃、伊勢、下野、甲斐、武藏、下總、伊豫、周防、備前、越後、山城、肥前、信濃ノ諸國アリ

藍葉ノ產地ハ、阿波ヲ以テ第一等トシ、尾張之ニ次ギ、其他武藏、筑後、伊勢、三河、美濃、安藝、常陸、備後、越後、肥前、信濃、備中、筑前、近江、紀伊、讃岐、伊豫、播磨ノ諸國アリ

葉烟草ハ、美作、阿波、常陸、豐後、磐城、相模ヲ以テ其產出多キ土地トス、其他備後、上野、下野、大隅、薩摩、肥前、備中、信濃、安藝、日向、近江、美濃、甲斐、伊豫、豐前ノ諸國アリ

大豆ハ、武藏、常陸、陸前、肥後、信濃、越後、肥前、下總、上野、陸奥、陸中、岩代、羽後、羽前ノ諸國ニ多ク產出ス

小豆ハ、武藏、肥後、常陸、上野、信濃、陸奥、伊豫ノ諸國ニ多シトナス

重要農産物概表

道	國名	米	麥	繭	繭絲	製茶	綿	藍	煙草	大豆	小豆	製糖	甘藷
畿内	山城					四十六万余貫	十四万余貫						
	大和	四十六万余石	十二万余石			三十三万余貫	五十七万余貫		七万九千余貫				
	河内	三十九万余石	十一万余石			五万余貫	百七万余貫						
	和泉						八十六万余貫					四十万四千余貫	
	攝津	五十六万余石	十八万余石				百廿二万余貫						
東海道	伊賀					八万七千余貫							
	伊勢	八十二万余石	二十三万余石			四十五万余貫	四十六万余貫	六十万余貫					
	尾張	七十一万余石	四十五万余石	一万余石			百七十二万余貫	百万余貫					
	三河	四十六万余石	三十五万余石			十五万余貫	百三十九万余貫	三十二万余貫					一千余万貫
	遠江	三十五万余石	十七万余石			四十三万余貫						廿六万七千余貫	
	駿河	三十一万余石	十五万余石			三十六万余貫						廿万六千余貫	
	甲斐		三十四万余石	五万余石	四万七千余貫		四十二万余貫		六万余貫				一千百余万貫
	相模		三十万余石	三万五千余石	一万二千余貫				三十万余貫				五百余万貫
	武藏	百三十六万余石	百五十三万余石	九万四千余石	七万一千余貫	二十七万余貫	四十万余貫	六十九万余貫		二十六万余石	三万四千余石		一千五百余万貫
	上總	五十七万余石	三十三万余石										
	下總	八十五万余石	五十六万余石			十五万余貫	三十八万余貫			十万余石			七百万余貫
	常陸	八十三万余石	五十七万余石			十二万余貫	九十二万余貫	二十六万余貫	三十五万余貫	十九万余石	一万七千余石		五百万余貫
東山道	近江	百十三万余石	十一万余石	九万六千余石	四万八千余貫	三十三万五千余貫		十六万余貫	九万余貫				
	美濃	八十八万余石	四十二万余石	四万六千余石	二万七千余貫	三十二万余貫	四十九万余貫	二十九万余貫	九万余貫				
	飛騨			二万四千余石	二万五千余貫								
	信濃	百四十四万余石	四十一万余石	十九万八千余石	十四万四千余貫		十二万余貫	十七万余貫	十二万余貫	十二万余石	一万三千余石		
	上野	三十九万余石	五十九万余石	十三万五千余石	十七万一千余貫				十八万余貫	十万余石	一万七千余石		
	下野	六十一万余石	五十七万余石	一万余石			四十三万余貫		十五万余貫	十万余石			
	磐城	五十四万余石	十三万余石	四万七千余石	四万四千余貫				三十万余貫				
	岩代	六十三万余石	十二万余石	六万七千余石	九万余貫					七万余石			
	陸前	八十二万余石	二十五万余石	四万二千余石	四万余貫					十五万余石			
	陸中	四十九万余石	四十八万余石	一万七千余石						九万余石			
	陸奥	五十五万余石								十万余石	一万二千余石		
	羽前	百[illegible]万余石		四万余石	三万一千余貫					五万余石			
	羽後	[illegible]余石			二万一千余貫					七万余石			
北陸道	越前	五十八万余石		二万五千余石		六万余貫							
	加賀	四十四万余石		一万九千余石	三万二千余貫	五十万余貫							
	能登	三十四万余石											
	越中	百四十三万余石		一万八千余石	一万四千余貫	五万余貫							
	越後	二百十八万余石		三万五千余石	二万余貫	十六万余貫	二十一万余貫	十八万余貫		十二万余石			
山陽道	播磨	九十四万余石	三十九万余石			十二万余貫	六十六万余貫	七万余貫					
	美作					九万八千余貫			五十六万余貫				
	備前	四十三万余石	十六万余石				二十七万余貫					十四万三千余貫	
	備中	三十六万余石	二十八万余石				七十九万余貫	十二万余貫	十二万余貫				
	備後	四十万余石	二十八万余石				七十二万余貫	十九万余貫	二十四万余貫				九百余万貫
	安藝	五十三万余石	二十八万余石			八万四千余貫	七十九万余貫	二十八万余貫	十一万余貫				一千八百余万貫
	周防	四十八万余石	二十六万余石			十二万余貫	二十七万余貫						六百余万貫
	長門	四十一万余石	十三万余石										七百余万貫
山陰道	丹波		十四万余石		一万七千余貫	十五万余貫							
	丹後				一万余貫								
	但馬			三万三千余石	一万三千余貫								
	伯耆						八十万余貫						五百余万貫
	出雲	四十六万余石	十万余石										
	石見					五万九千余貫							
南海道	紀伊	六十一万余石	二十六万余石			十五万余貫		十一万余貫					一千五百余万貫
	阿波	三十四万余石	三十三万余石			七万余貫		二百廿三万余貫	三十九万余貫			四十二万九千余貫	
	讃岐	六十三万余石	四十六万余石				六十六万余貫	十一万余貫				六百八十万五千余貫	五百余万貫
	伊豫	五十八万余石	三十四万余石			十二万余貫	三十三万余貫	八万余貫	六万余貫		一万一千余石	十九万三千余貫	二千余万貫
	土佐	四十四万余石	十一万余石			二十九万余貫							
西海道	筑前	七十五万余石	二十万余石					十二万余貫	八万余貫				
	筑後	五十四万余石	二十五万余石			二十六万余貫		六十四万余貫				十三万四千余貫	
	豊前	四十四万余石	十八万余石						六万余貫				
	豊後	四十二万余石	三十七万余石			十三万余貫			三十四万余貫				九百余万貫
	肥前	百〇五万余石	五十万余石			十三万余貫	十三万余貫	十八万余貫	十三万余貫	十二万余石		三十四万四千余貫	三千六百余万貫
	肥後	百〇三万余石	六十二万余石			十七万余貫				十四万余石	三万一千余石	三十一万八千余貫	三千三百余万貫
	日向	四十三万余石	十四万余石			十九万余貫			十万余貫			十三万余貫	二千百余万貫
	大隅					十一万余貫			十七万余貫			百四十三万四千余貫	
	薩摩		十二万余石			七万余貫						十二万八千余貫	
	沖繩												四千余万貫

米ハ出来高三十万石以上〇麦ハ十万石以上〇繭ハ一万石以上〇繭糸ハ一万貫以上〇製茶ハ五万貫以上〇綿ハ八十万貫以上〇藍烟草ハ共ニ六万貫以上〇大豆ハ五万石以上〇小豆ハ一万石以上〇製糖ハ十万貫以上〇甘藷ハ五百万貫以上ヲ載ス（本表ハ農商務省明治十九年中ノ調査ニ拠ル）

百廿八ノツギ

藍葉ノ産地ハ、阿波ヲ以テ第一等トシ、尾張之ニ次ギ、其他武藏、筑後、伊勢、三河、美濃、安藝、常陸、備後、越後、肥前、信濃、備中、筑前、近江、紀伊、讃岐、伊豫、播磨ノ諸國アリ

葉烟草ハ、美作、阿波、常陸、豊後、磐城、相模ヲ以テ其産出多キ土地トス、其他備後、上野、下野、大隅、薩摩、肥前、備中、信濃、安藝、日向、近江、美濃、甲斐、伊豫、豊前ノ諸國アリ

大豆ハ、武藏、常陸、陸前、肥後、信濃、越後、肥前、下總、上野、陸奥、陸中、岩代、羽後、羽前ノ諸國ニ多ク産出ス

小豆ハ、武藏、肥後、常陸、上野、信濃、陸奥、伊豫ノ諸國ニ多シトナス

製糖（白下、二度押、二半、三盆、黒糖）ノ産地ハ、讃岐、大隅ヲ以テ第一等トシ、肥後、阿波、和泉、之ニ次ギ、其他遠江、肥前、駿河、伊豫、備前、筑後、日向、薩摩等ノ諸國皆各十數萬貫以上ノ多額ヲ出ダス

甘藷ハ、肥前、肥後、沖繩ヲ以テ第一等ノ産地トシ、日向、伊豫、安藝、武藏、紀伊、甲斐、三河ノ諸國之ニ次ギ、豐後、備後、下總、長門、周防、讃岐、相模、常陸、伯耆等、又各一國ニシテ五百萬貫以上ヲ出ダサヾルハナシ

以上擧グル所ハ、皆現時我農業上ニ於テ最勢力アリ、又最モ必用ノ産物ニテ、其數量モ亦最多額ヲ占メタルモノヽミ、其他肥後ノ粟（年ニ五十餘万石ヲ産シ、）

（農家概ネ之ニ甘藷、或ハ米ヲ混炊シテ常食ニ充ツ）備中、備前ノ藺（備中凡四十六万余貫、備前凡十一万余貫）下野ノ麻（凡百七十三万余斤ヲ出ス）ニ於ル亦皆特有多産ヲ以テ有名ナリ

牧畜家禽ノ概況

牛　明治十九年農商務省ノ調査ニ據レバ、牝牡ヲ併セテ、其總數百二萬四千四百九十六頭ニシテ、中、内國種百一萬五千四百七十五頭、雜種、六千百二十二頭、外國種、二千八百九十七頭トス、此總數ヲ以テ、前年ノ總數百六萬百七十頭ニ比スレバ、三萬五千四百七十四頭ヲ減ジ、又之ヲ十年ヨリ十八年ニ至ル、九年間ノ平均頭數ニ比スレバ、七萬七千九頭ヲ減少セリ、因テ今、十九年ノ現數

ヲ以テ、全國三千八百十五萬一千二百十七人ノ人口ニ平均スレバ、一千人ニ付牛數ハ僅ニ二十七頭ニ過ギズ、今之ヲ外國ニ比スレバ北米合衆國ノ牛數ハ、一千八百八十七年刊行スコットケルチー氏ノ万國年鑑ニ拠ル以下之ニ倣フ四千五百五十一萬頭ニテ、人口一千人ニ付九百一頭、獨逸國牛數ハ、一千五百七十八萬五千頭ニテ、同一千人ニ付、三百三十七頭、佛蘭西國牛數ハ、一千百七十五萬六千頭ニテ、同一千人ニ付、三百八頭、露西亞國牛數ハ、二千三百六十二萬八千頭ニテ、同一千人ニ付、二百六十九頭、澳地利國牛數ハ、八百五十八萬四千頭ニテ、同一千人ニ付、三百七十五頭、瑞典

内國種外國種牛ノ圖



國牛數八、二百三十二萬七千頭ニテ、同一千人ニ付三百九十七頭、和蘭國牛數八、百四十七萬四千頭ニテ同一千人ニ付、三百四十五頭北米合衆國一千八百八十六年、獨逸、佛蘭西、露西亞八、一千八百八十三年、澳地利

八、一千八百八十年、瑞典、和蘭ハ、一千八百八十四年ノ事實ナリ、以下之ニ倣フトス」之ヲ以テ本邦當時牧牛事業ノ微々タル年次ニ增額ヲ見ズシテ、却テ甚キ減數ヲ示スガ如キハ、將來ノ國計上ニ於テ、須ク最モ注意スベキ農部ノ一大要件ナリ、因テ更ニ諸道各國牧牛ノ狀況ヲ採グルニ、畿內、東海、東山、北陸ノ四道ニ少ク、山陰、山陽、南海、西海ノ四道ハ漸次ニ多クシテ、其最モ多數ナルハ、豐後、肥前、肥後ノ諸國ヲ以テ魁トシ、其用專ラ田圃ノ耕耡ニ驅使シ、或ハ米麥及雜穀收穫ノ運搬ニ役シテ、食料繁殖ノ為ニ飼牧スルハ甚稀ナリ、其種類ハ概ネ內國種ヲ多シトシ、雜種、外國種ノ類ハ極テ少ナク、其形體ハ總テ小

ニシテ力强キモ、勞力久キニ堪ヘザルガ如シ、南海ノ諸國、及西海ノ肥後、東山ノ陸中地方等ハ、兼テ運搬ニ使用スルコト多シ［畿内、山陽、山陰ノ地方ニテモ專ラ運搬ニ用フルヲ見ルモ、其使用ノ牛數少ナキヲ以テ玆ニ記サズ］但馬、因幡、地方ノ牛ハ、其性質概ネ銳敏ニシテ、出雲、伯耆、及備後奴可郡地方ノ牛ハ總テ溫順、作州產ハ、其氣稍剛ナリ、又石見牛ハ出雲產ノモノニ比スレバ、稍活潑ニシテ隱岐牛ハ稍劣等ナルガ如シ、○九州ノ牛ハ、肥前ノ五島ニ產スル種ヲ第一等トス、其他肥後、豐後、薩摩、大隅、諸國ノ產ハ、概ネ隱岐牛ニ似テ劣等ナレドモ、其性質ハ頗ル剛猛ニシテ、相集レバ乍チ相突

牡牛車ヲ衝ントスル圖



キ、又能ク人ヲ傷クルニ至ル

東北諸州ノ牛ハ、其形體頗ル壯大ニテ、能ク耐忍ノ力アルモ、其性極テ鈍ク、馴養スルモ容易ニ事ヲ覺ラザルノ質アリ、然レドモ溫

順ニシテ、使役シ易ク、女子小童ト雖、一人ニテ二三頭ヲ驅使スルコト甚容易ナリ、故ニ東北ニテハ、一夫牡牛七頭ヲ驅使スルヲ例トシ、其荷物ヲ運搬スルヤ、近キハ十數里、遠キハ數十里外ニ至ル、皆各數日間ノ食糧ヲ齎シ、行々原野ノ中ニ牧養シツヽ、夜ハ原頭ニ露宿シ、一日ニ平均五六里程ノ緩歩ヲ期シテ、優々南北ニ往來スルノ風習アリ、即左ノ第一圖ハ其隊ヲナシテ荷物ヲ運搬スル實景ヲ示シ、第二圖ハ原頭露宿ノ狀況ヲ表シタルモノナリ（一牧夫牛七頭ヲ驅使スルモノ牛ノ獨歩ニ任セ、牧夫ハ唯其方ノ向ヲ號令スルノミ、口繩ハ皆其着荷ノ端ニ挿テ毎牛之ヲ連續スルニ非ラズ、又牧夫自ラ其繩ヲ取ルニモ非ラズ、其一隊ノ一牛若シ路畔ニ止リテ秣セントスレバ、鞭ヲ擧テ之ヲ叱咤ス、此ノ如

第一圖



第二圖





クニシテ能ク隊伍ヲ斎サズ、往來ノ人ニモ觸レズ、或ハ一二隊同行スルトキハ順次ニ相追テ數丁相連ルアリ、或ハ路ノ両端ニ二隊並行スルコトアリテ、旅人其間ヲ通行スルモ敢テ牛ニ迫ラルヽノ恐レナキガ如シ、又其露宿スルヤ、豫メ原野適當ノ地ヲトシテ日没ノ二三時間前ニ毎牛ノ着荷ヲ解キ、之ヲ以テ宿地ニ壘ヲ續ラシ、牧夫自ラ其中ニ炊飯シ、牛ハ皆其近傍ニ放牧シテ、自飼ニ就カシム、夜ニ入レバ、一隊ノ牛皆牧夫ノ宿壘ニ集リ、七頭各其周圍ヲ續リテ臥スコト圖ノ如キ状ヲナス、東北原野ニテハ夜間ニ至レバ、豺狼往々人ニ迫ルノ憂アリ、故ニ露宿スルニ當リテ七頭ノ牛暗ニ其外ヲ守リテ自然ニ防禦ヲナスト云ス、是亦地方ノ一奇談ニテ、牛ノ頗良能ク牧夫ノ令ヲ守ルモ亦是馴致ノ一奇事ナルカ

牛數

國名	總數	農用	運搬用	繁殖用
豐後	六万五千九百三十二頭	六万五千六百八十三頭		
肥後	四万七千六百九十八頭	四万六千四百十七頭	一千二百三十九頭	

國名	總數	農用	運搬用	繁殖用
肥前	六万二千二百十五頭	五万九千二百二十四頭		
播磨	三万八千三百四十頭	三万七千五百六十三頭		

伊豫	三万八千百〇四頭	三万三千八百三十四頭	三千〇五十三頭	一千百四十頭
讃岐	三万五千四百三十六頭	三万五千四百十頭		
安藝	三万五千百七十九頭	三万五千〇三十六頭		
周防	三万二千五百五十頭	三万二千四百五十二頭		
長門	三万一千五百三十三頭	三万一千四百十七頭		
石見	二万六千六百頭	二万五千八百九十一頭		
丹波	二万四千〇九十三頭	二万二千八百六十九頭		
薩摩	二万二千四百七十三頭	二万一千九百七十三頭		
伊勢	二万一千二百八十三頭	二万〇九百三十八頭		
伯耆	一万九千五百十九頭	一万八千五百六十五頭		
豊前	一万七千二百〇四頭	一万七千百五十八頭		
土佐	一万四千四百五十三頭	一万三千八百〇九頭		
備後	三万七千九百二十二頭	三万六千百三十七頭		一千七百十二頭
紀伊	三万五千二百八十二頭	三万三千三百十六頭	二千八百二十八頭	
備中	三万四千百〇九頭	三万三千八百六十九頭		
大隅	三万二千四百六十頭	三万二千〇八十八頭		
筑前	二万七千五百五十二頭	二万七千二百三十三頭		
美作	二万四千二百四十三頭	二万三千〇四十一頭		
日向	二万三千七百九十六頭	二万二千八百四十六頭		
備前	二万一千七百六十五頭	二万一千百八十頭		
阿波	二万〇七百五十頭	二万〇百四十六頭		
出雲	一万八千三百九十一頭	一万七千〇四十四頭		
陸中	一万五千九百〇三頭	一千八百三十三頭	三千九百五十八頭	一万〇〇二十八頭
近江	一万二千八百二十五頭	一万二千五百十頭		

但馬	一万二千百九十一頭	一万一千六百八十四頭
因播	一万〇九百二十二頭	一万〇七百〇三頭

總數一國ニシテ一万頭以上ニ至ラザルモノハ此表ニ載セズ、且農用、運搬用、繁殖用ノ三種ニ分ツモ、是亦一種一千頭以上ニ至ラザルモノハ、皆記サズ、故ニ總數幾許ト云フモ全ク三種ノ合計ニ非ラザレバ、三種ヲ合シテ尚總數ニ足ラザルハ、此外乳用ニ飼牧スルノ數アルニヨルナリ○本表ハ農商務省ノ明治十九年調査ニ拠ル

馬

十九年ノ總數牝牡ヲ併テ、百五十三萬七千百四頭ニシテ、中、内國種、百五十三萬四千五百十七頭、雜種二千五百三十三頭、外國種五十四頭トス、此總數ヲ以テ前年ノ總數百五十四萬八千二百三十二頭ニ比スレバ、現ニ一萬一千百二十八頭ヲ減ジ、又之ヲ十年ヨリ十八年ニ至ル九年間平均ノ頭數ニ比スレバ、一千三百四十一頭ヲ減

少セリ、因テ今十九年ノ現數ヲ以テ全國ノ人口ニ平均スレバ一千人ニ付馬數四十一頭トス、又之ヲ外國ニ比スレバ

北米合衆國ノ馬數一千二百十六萬二千頭ニテ、人口一千人ニ付、二百四十一頭、獨逸國馬數三百五十三萬二千頭ニテ、同一千人ニ付、七十五頭、佛蘭西國馬數二百八十六萬八千頭ニテ、同一千人ニ付、七十五頭、露西亞國馬數一千七百八十八萬頭ニテ、同一千人ニ付、二百四頭、澳地利國馬數百四十六萬三千頭ニテ、同一千人ニ付、六十四頭、瑞典國馬數四十七萬六千頭ニテ、同一千人ニ付、百二頭、和蘭國馬數二十六萬

九千頭ニテ、同一千人ニ付、六十三頭トス
之ニ由テ之ヲ観レバ、本邦ハ馬數モ亦年次ニ減數ヲ示シテ、諸外國トノ比較モ亦頗ル劣等ニ位セリ、本邦牧畜ノ事業ハ、奚レゾ斯ノ如クニ振ハザルヤ、從來農産專業ノ國土ニシテ、今尚此衰微ノ現象ヲ觀ルコト實業ニ汲々タルモノ、豈浩嘆セザルベケンヤ

因テ更ニ諸道各國牧馬ノ概況ヲ按ズルニ、現時ノ馬數、西海、東山ノ二道ニ多クシテ、東海、南海、及山陽、北陸ニ少ナク、畿内、山陰ノ二道ニハ、一萬頭以上ヲ牧養スルノ國一モ有ルコトナシ、而シテ其專ラ耕耡ニ使用スルノ盛ナルハ、西海、山陽、及

東北人ノ馬ヲ使御スル圖



南海ノ諸道ニシテ關東及東北ノ諸國ハ未曾テ馬耕ヲ用ヒズ、已ニ此利ヲ知ルモ未其事ニ習ラハザルナリ、其農用ニ使用スルハ、唯ニ穀菜及肥料ノ運搬ニ過ギズシテ、其他ハ皆通常ノ荷物運搬及繁殖ノ用ニ供スルヲ主ト

スルノミ

馬ノ性質モ亦東西地隔リ、國異ナリテ自然ニ差別ヲ生ジ、關東及東北諸州ノ馬ハ其形體概ネ壯大ニテ、一般ニ柔順ノ性ヲ帶ビ、同群相踼齰スルノ憂ナク、最モ多ク牝馬ヲ牧養シ、婦女一人ニテ數馬ヲ使用スルノ習俗アリ、之ニ反シテ西南諸州ノ馬ハ其形體稍小ナルモ、性質剛强ニテ、動モスレバ人ヲ蹴蹋スルノ恐レアリ

又西南諸州ニテモ牝馬ヲ牧養スルハ、肥後、日向、大隅ノ諸國ヲ多シトシ、其他ハ概ネ牡馬ヲ使用スルノ慣習アリ

馬數

國名	總數	農用	運搬用	繁殖用
肥後	十一万一千百四十一頭	十万九千五百八十二頭	一千三百四頭	
日向	七万五千四百五十八頭	七万三千百九十九頭	二千百三十一頭	一千百二十八頭
信濃	七万一千七百六十五頭	五万五千四百九十五頭	一万七百四十七頭	五千五百二十三頭
陸前	七万八百六十二頭	五万四千七百七十五頭	二千五百七頭	一万三千五百八十頭
大隅	五万五千四百十四頭	五万三千九百八十四頭		
下野	五万二千八百六十頭	四万一千六百五十九頭	八千百三十六頭	二千六百十一頭
越後	四万五千百五十九頭	四万三千七百七頭	一千四百二十頭	
肥前	四万二千四十三頭	三万九千七百五十二頭		
下總	三万八千三十二頭	三万五千二十四頭	二千九百九十八頭	
上野	三万二千七百三十六頭	二万九千二十九頭	二千六百五十三頭	
美濃	二万六千六百八十一頭	二万二千七百六頭	三千七百二十五頭	

國名	總數	農用	運搬用	繁殖用
陸中	八万四千三百五十六頭	五万四千八百四十二頭	四千六百四十八頭	二万四千八百六十六頭
陸奥	七万五千二百四頭	六万五千八十頭	三千百五十九頭	六千九百六十五頭
羽後	七万一千八十五頭	六万六千五百六十六頭	一千八百二頭	二千七百十六頭
磐城	六万三千五百九十三頭	四万六千四百三十七頭	三千四百四十三頭	一万三千七百十三頭
常陸	五万二千六百三十七頭	四万九千三百七十四頭	二千八百九十七頭	
薩摩	四万九千百十頭	四万六千八百三十三頭	一千四百九頭	
豊後	四万二千五百七十六頭	四万一千百六十四頭	一千三百八十六頭	
岩代	四万五百三十九頭	三万五千六百四十四頭	四千四百三十八頭	
武藏	三万六千二百八十五頭	二万九千二百五頭	六千七百三十一頭	
土佐	三万二千五百八十二頭	二万八千七百十頭	二千六百十九頭	
羽前	二万四千二百九十三頭	二万二千二百四十八頭	一千九百一頭	

伊豫	二万三千九百二十九頭	九千八百六十二頭	一万一千七百三十七頭	二千三百三十頭
上總	二万一千六百五十六頭	一万八千八百六十五頭	二千五百五十四頭	
甲斐	一万七千四百四十一頭	一万五千二百四十六頭	一千九百二十六頭	
三河	一万四千五百十九頭	一万七百三十一頭	二千五百八十三頭	
長門	一万二千二百五十頭	九千四百三十一頭	二千八百十九頭	
能登	一万二百七十四頭	九千三百三十三頭		
筑後	二万一千九百九十頭	二万一千二百二十五頭		
阿波	一万八千八百七十二頭	一万七千四百九十八頭	一千三百七十頭	
筑前	一万六千八百七頭	一万六千三百四十一頭		
豊前	一万三千六百七十六頭	一万三千十三頭		
周防	一万一千三十九頭	九千百六十六頭	一千八百七十三頭	

總數一國ニシテ一万頭以上ニ至ラザルモノ及農用、運搬用、繁殖用ノ三種モ亦牛數表ト同ジク一種千頭以上ニ至ラザレバ皆記サズ

家禽飼養ノ事ハ、農家耕作ノ餘業トシテ必ズ従事スベキ一事業ナルニ、我國一般ノ習慣トシテ其利潤ノ果シテ如何ナルヤヲモ考究スルモノナク、之ガ為ニ古來已ニ之ヲ奨勵シタル先輩ア

ルモ、其言尚久ク世ニ行ハレズ、關東ニテ上總地方僅ニ茲ニ注意スル者アリテ、年ヲ追テ漸次ニ其數ヲ增加シ、近時始テ家雞飼養ノ一區域トナリ〔明治二十二年春期ノ調査ニ拠ルニ上總ノ山邊、武謝ノ二郡ニテ其產卵ノ高凡一億六千五百八十八万三千八百餘個ヲ出セリ〕之ニ次ギテ、山陰ノ石見地方ニモ稍此業行ハレテ、〔明治二十二年春期ノ調査ニ拠ルニ石見ノ迩摩、安濃ノ二郡ニテ其飼養ノ家雞ハ凡一万三千六百二十餘羽アリト云ヘリ〕延テ山陽ニ移リ、備中、備前ノ各地亦漸ク之ニ從事スル者起リ、南西暖地ノ諸國モ亦相繼ギテ專ラ茲ニ注意スルノ狀勢ヲ致セリ、此時ニ當リテ能ク其飼養ノ方法ヲ研究シ、或ハ從來ノ放飼ニ適スル地アリ、或ハ庭園柵養ノ可ナルアリ、或ハ軒下ノ小柵籠

飼ニ止ムベキアリ、殊更ニ多數ヲ飼養スルヲ好マズシテ、單ニ農部ノ餘業トシテ專ラ簡易ノ良法ニ據ルヲ是レ務ムベキナリ、本邦ノ如キ穀果豐饒、氣候暖和ノ良土ニ在リテハ、豈唯家雞ノ飼養ニノミ止マリテ可ナランヤ、羊豚飼牧ノ餘業亦必ズ興スベキナリ、予曩ニ西南ノ諸國ヲ周リシニ、日向、大隅、薩摩ノ各地ニテハ現ニ村落戸々ニ養豚事業ノ稍興リタルヲ目擊セリ〔日向都城ノ地方最盛ナリ〕尋テ南島ヲ探グルニ當リテ、大隅ノ群島中口之永良部島〔屋久島ノ西ニ在リテ鹿兒島ヲ距ルコト凡八十四海里許〕ニ至リシニ、此島中ニ一ノ牧羊場アリテ「メリノ」羊ノ良種數百頭ヲ牧養スルアリ、其繁殖漸次ニ好

結果ヲ見ルニ至リ、年々剪毛ノ數量殆ド二千餘封度ヲ出ダスト云ヘリ（明治十八年ノ始業ニテ鹿兒島縣士族ノ飼牧スル所ナリ）其他島中沿海岸ノ漁家ニハ毎戸三四頭ノ豚ヲ養ハザルハナク、村中ヲ徘徊スルノ間其臭氣鼻ヲ穿ツ許リナリキ、是ヨリ東北ニ當リテ馬毛島（種子ケ島ノ西ニ在リ）ト云フ一小島中ニモ一ノ牧羊場アリテ、此ニモ「メリノ」羊百數十頭ヲ牧養セリト云フ

既ニシテ沖繩本島ヲ周グルニ、此島中ニテモ農村漁家ノ別ナク、到ル所戸々養豚ノ盛リナルハ、本州諸道ノ中ニ於テ未曾テ見聞セザルノ状況アリ、故ニ那覇首里等ノ市街地ニハ、或ハ其生豚

ヲ鬻グアリ、或ハ其胾肉ヲ賣ル者アリ（唯家雞ノ飼養ノミハ口之永良部島ノ如キヲ見ズ）其他八重山群島、及久米、宮古、多良間、伊江ノ諸島、皆牛、馬、羊、豚ノ牧畜場ニハ、偃強ノ良地ニシテ、今現ニ八重山群島中ニ、牛數凡二千三百餘頭、馬數凡五千餘頭、久米島ニ、牛數凡六百餘頭、馬數凡二百八十餘頭、宮古島ニ牛數凡一千九百餘頭、馬數凡二千百六十餘頭、多良間島ニ、牛數凡三百六十餘頭（馬數ハ僅ニ四頭）伊江島ニ、牛數凡七百餘頭、馬數凡六百餘頭ヲ牧養セリ、而シテ此中宮古、多良間二島中ニ牧養スルハ、總テ内國雜種ニ係リ、其他八重山群島、及久米、伊江諸島ノ牛馬種ハ、皆其島産

ノモノ、ミニテ、形體極テ小ナルヲ多シトス、然レドモ皆能ク山野ヲ馳驅シ、物ヲ運搬スルニ適スルガ如シ

以上ノ諸島中ニ於テ、其最牧場ニ適スルノ地ハ、八重山群島中ニテ、與那國(ヨナクニ)〔周圍凡六里〕石垣(イシガキ)〔周圍凡三十里〕ノ二島、及宮古〔周圍凡二十五里餘〕多良間〔周圍凡三里餘〕久米〔周圍凡八里〕ノ三島トス、此五島ハ皆島中沃野平原多クシテ、水利ニ乏カラズ、氣候頗ル溫暖ナルヲ以テ、年中青草絶ユルノ期節ナシ

日本地理正宗前編上巻終

地理書出版廣告

墺地利國博士カール、チエーデン氏原著　英吉利フィンドレー、マイルヘード氏英譯

日本　林吾一　朝夷六郎　松島剛　田中登作　橋本武　重譯

萬國地理正宗

目次

此書ハ墺地利國維也納府ノ博士カールチエーデン氏ノ原著ヲ重譯セシモノニシテ原著書ハ廣ク墺國ノ諸學校地理科ノ教科書トナリ之ヲ獨逸語ヲ用ヒザル國々ニテ飜譯シ以テ教科用書ニ充ツル處ハ和蘭葡萄牙以太利露西亞英吉利北米合衆國等ナリト云ヘリ。其書ノ編纂宜キヲ得テ教科書ニ適スルノ價値多キコト以テ推知スベキナリ。今前掲ノ五氏ニ請フテ重譯セル英譯ノ書ハ千八百八十九年(本年)ノ新刊書ナレバ其記述ノ事項統計等皆最近ノモノニ係レリ。而シテ此書単ニ教科用ニ適スルノミナラズ實業ニ篤志ノ人ハ必ズ熟讀スベキノ良書ニシテ此書ノ斯ク廣ク行ハルヽモ亦此点ニ坐スルナランカ。第五板ノ序文ニ原著者云ヘルコトアリ……リ。然レドモ其記述ハ純粋ナル地理學上ノ問題……鮮説スルモノニアラズシテ只地球ヲ實際上明……際ノ要求ハ地球ヲ人類ノ住所トナシ地球ノ各部……ニアリ。斯ク描寫センニハ農業工業商業ノ状況……及ビ動植礦物等ヨリ演繹シ來レル其國ノ貧富ヲ……ル所ヲ知ルニ足レリ。弊舍夙ニ萬國地理書ノ良……ト久シ。今ヤ此善良ナル原書ヲ得タレバ直ニ前……此書ヲ完成スルニ至レリ。此書ハ師範學校中學……育ニ從事スル人及ビ實業家等ノ廣ク閲讀スベ……又コノ萬國地理正宗ヲ出版シタレバ日本萬國……フ陸續購覽セラレンコトヲ

東京神田區柳原河岸十四號地

普及舍主　辻敬之　敬白

地理書出版廣告

墺地利國博士カール、チエーデン氏原著　英吉利フインドレー、マイルヘード氏英譯

日本　林吾一　朝夷六郎　松島剛　田中登作　橋本武　重譯

萬國地理正宗

目次

日本地理正宗　前編上巻 …… 普及舎

此書ハ墺地利國維也納府ノ博士カール、チエーデン氏ノ原著ヲ重譯セシモノニシテ、原著書ハ廣ク墺國ノ諸學校地理科ノ教科書トナリ、之ヲ獨逸語ヲ用ヒザル國々ニテ飜譯シ、以テ教科用書ニ充ツル處ハ、和蘭葡萄牙、以太利、露西亞、英吉利、北米合衆國等ナリト云ヘリ。其書ノ編纂宜キヲ得テ、教科書ニ適スルノ價値多キコト、以テ推知スベキナリ。今前掲ノ五氏ニ請フテ重譯セル英譯ノ書ハ、千八百八十九年（本年）ノ新刊書ナレバ、其記述ノ事項統計等、皆最近ノモノニ係レリ。而シテ此書單ニ教科用ニ適スルノミナラズ、實業ニ篤志ノ人ハ必ズ熟讀スベキノ良書ニシテ、此書ノ斯ク廣ク行ハルヽモ、亦此点ニ坐スルナランカ。第五板ノ序文ニ原著者云ヘルコトアリ、曰ク、今日公衆ノ要求スル所ハ、地球ノ記述ニアリ。然レドモ其記述ハ、純粹ナル地理學上ノ問題ヲ論議スルモノ、若クハ地理學上奇異ノ事實ヲ鮮説スルモノニアラズシテ、只地球ヲ實際上明瞭ニ記述スル者ヲ求ムルニ在リ。故ニ現時實際ノ要求ハ、地球ヲ人類ノ住所トナシ、地球ノ各部ヲ各人民ノ活動場ナリト描寫セシメントスルニアリ。斯ク描寫センニハ、農業工業商業ノ状況ヲ鮮説シ、又各國ノ位置、氣候、地形、人民ノ性情及ビ動植礦物等ヨリ演繹シ來レル其國ノ貧富ヲモ説明セザル可カラズ云々、以テ著者ノ意ノ在ル所ヲ知ルニ足レリ。弊舍夙ニ萬國地理書ノ良教科書ノ乏キヲ憂ヘ、之ヲ出版セント欲スルコト久シ。今ヤ此善良ナル原書ヲ得タレバ、直ニ前五氏ニ重譯ヲ請ヒ、且增補ヲモ併セ録シテ、以テ此書ヲ完成スルニ至レリ。此書ハ師範學校中學校ノ教科書トシテ適切ナルノミナラズ、小學教育ニ從事スル人、及ビ實業家等ノ廣ク閲讀スベキ良書ナリ。弊舍曩ニ日本地理正宗ヲ出版シ、今又コノ萬國地理正宗ヲ出版シタレバ、日本萬國ノ地理書始メテ大成スルニ至レリ。兩書トモ、請フ陸續購覽セラレンコトヲ

東京神田區柳原河岸十四號地

普及舍主　辻敬之　敬白

明治二十二年十月